夏の夜に消えたあの子

金椎響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏の夜に消えたあの子

【Ｎコード】
Ｎ７２３２Ｖ

【作者名】
金椎響

【あらすじ】
高校生の「ぼく」は地元横浜の町内会が運営する夏祭りに見回りとして参加する。憧れの瀬奈さんとの関係、そして賑わう祭りの会場で一人浮いている自分にやきもきするそんな彼の元に、迷子捜索の依頼が舞い込んだ。彼は迷子の姿を探しに祭りの会場を歩いていると、一人の少女と出会う。迷子から始まる、偏屈な恋愛小説。

（前書き）

この小説は二日間で、約４００００字の小説が書けるのだろうかと思って挑戦してみたものです。
読者の方々におかれましては、どうかあらかじめそのことを念頭において読んで頂けると幸いです。
つまり、なにが言いたいかというと「そんなに期待しないでね」っていう……。
誤字脱字から設定の整合性、展開等、様々な点において問題があるとは思いますが、その点についてはどうかご容赦の程を。

夜空に咲く花火を見ると、ぼくはいつでも思い出す。
無数の提灯で彩られた夜の暗がりに浮かぶ、あの子の華奢な後ろ姿を。
その姿は、網膜に鮮明なまでに焼き付いて、ぼくの視界から離れなかった。

◆

日が落ちて夜になっても、遠目には雲が重なり合って浮かんでいた。
豪雨になるかもしれない。
そんな嫌な予感を抱かせるような雲の下で、祭りが行われようとしていた。
雨天決行なのが恨めしい。
大雨洪水警報でも発令されてしまえば、後々起こるべくして起こるだろう種々雑多な面倒事のあれこれに関わらずに済んだのに。そう思うとやりきれない気持ちだった。
そんな乗り気でなかったぼくの気持ちを一八〇度変えさせたのは、瀬奈さんの姿だった。
「こんばんは」
最初、その女性が瀬奈さんだと、ぼくは気付かなかった。
普段は下ろしている髪をゆるく結って、菫色の帯に大人びた濃紺の浴衣を着ていたからだ。
前々から容姿の整った素敵な人だとは思っていたけれど。
彼女の浴衣姿には正直なところ、度肝を抜かれた。
ぼくよりもずっと年上の人のように見えるその姿は一見すると清楚でありながら、どこか妖艶さが漂っていた。

「ご苦労様です」
「いえ。ぼくはまだ何も……やってませんよ」
ぼくは一言、似合ってますよ、という言葉を彼女に送りたかった。だけど、残念なことにぼくは奥手だったからそんな気の利いたことは言えなかった。
いや、違う。きっと、人と本気で向き合えないのだ。いつも、肝心なところでぼくは背を向けて逃げてしまう。
「今日は見回り、頑張って下さいね」
「ええ」
「では、また後で」
ぼくの瞳をしっかりと捉えた瀬奈さんは、笑みを湛えながら言った。
その背中にぼくは何か問いかけようとした。しかし、彼女の姿はすっかり色褪せてしまった年代物の仮設テントのなかに入っていって、消えてしまった。
ぼくは、もう少し彼女と話したかった。
それを思うと歯痒かった。
彼女の慎ましい笑い声が、微かにだけどテントの奥の方から聞こえてくるような気がした。
ぼくは目を瞑って、彼女の後ろ姿を目の奥で再現しようとする。濃紺の浴衣から垣間見える項の白さが、ぼうっと浮かび上がってすぐに曖昧に滲んだ。

夏の湿った空気が、背中に張り付いているようだ。
体にねっとりとまとわりつき、歩みを妨げているような気がして気持ちが悪かった。
もっと軽快に歩ければいいのに。
らしくもない独り言を呟いて、ハッと我に返った。雑踏はぼくの言葉を容易にかき消してしまって、ぼくの呟きに反応する人間は皆無だった。

皆、思い思いに祭りを楽しんでいるように思えた。
幼い子どもは親と手を繋ぎ、綿飴やリンゴ飴を片手に露店の出し物を楽しんでいる。少年少女は互いに着慣れない浴衣や甚平姿を披露し合い、頬を赤く染めている。若者達は徒党を組んで闊歩し、恋人達は幸せな思い出を紡いでいる。老いもまたそんな彼らを見て目を細め、ありし日を思い出して物思いに耽っているように見えた。
喧噪のなかを泳ぎながら、自分がまるで迷子になってしまったかのような、そんな錯覚を覚えた。
気が付いたら、自分の知らない場所に放り出されているような感覚に、こころのなかがざわめいた。
一人、取り残されたような感覚だった。
そんなぼくを、携帯が現実に呼び戻した。
自分が気付くまでの間に、かなりの時間が経ってしまったように思える。それでも、電話は切れることなく鳴り続けていた。
「あ、もしもし」
その第一声だけで、誰がかけてきたのかぼくにはすぐにわかった。
若い女性の落ち着いた声音。間違えるはずもない。瀬奈さんからだった。
「迷子の届けが本部にありましたので、探して下さいませんか？」
「ええ、構いませんよ。それが今日の仕事ですからね」
すぐに応じた。
自分に与えられた仕事でなくても、ぼくは瀬奈さんからの依頼であれば快く引き受けるつもりだった。
たとえ、それが深い皺を幾重にも顔に刻んだ町内会長の指示だったとしても。
「横浜市中区から来た子で、お名前がアシナケイ……」
彼女の明瞭な声がノイズで途切れる。
「あの、もしもし？」
「……すいません。聞き取れましたか？　イネ科の多年草の『芦』に、名前の『名』、土を二つ重ねた『圭』です」

「はい、わかりました。年齢は？」
「六歳です。……小学校の一年生」
スピーカーから砂を擦るようなノイズが増えて、瀬奈さんの言葉が急に遠くなる。
ぼくは思わず携帯を握る手の力を強めた。瀬奈さんの声をかき消すなんて。味気ない雑音相手に、ぼくは子どもじみた苛立ちを覚えていた。
「小学生なら自分の漢字、まだ習ってないかもしれませんね」
何気なく言った言葉だったけど、瀬奈さんからの返事はなかった。ササッという雑音が随所に入り込んで、彼女の声を明瞭に聞き取ることができない。
これでは、埒が明かないな。ぼくは思わず自分の後頭部を掻いた。せっかくの彼女からの依頼に水を差されたような気がした。居心地の悪さに耐えられなくなって、ぼくは言った。
「わかりました。ちょっと電波の状態が悪いみたいなんで、また後で追って連絡致します」
少し間が開いた。
瀬奈さんからの反応がない。
やはり、こちらの声が聞えていないのだろうか。だとしたら、虚しいなどと思ってしまう自分に苦笑した。
辛うじて聞き取れる声でお願いします、と一言あってから電話は切れた。
芦名圭。
横浜市中区に住んでいる小学校の一年生。
そこで、ぼくはこの圭くんが一体どんな生立ちなのか、訊くのを失念していたことに気が付いた。
Tシャツにズボン姿の普段着なのか、それとも甚平姿なのか、習い事の帰りのユニフォーム姿なのか……。
往来の激しい祭りのなかで、手がかりを欠いた状態で人探しをするなんて。我ながら無謀過ぎる。

ぼくは後頭部に手をやった。体中からどっと湯気が上がるような、羞恥にも似た焦りを感じた。
しかし、今ここで瀬奈さんにかけ直しても、またノイズの嵐だったら。きっと彼女を煩わせてしまうだけだろう。
とりあえず、ここは本部にいる瀬奈さんの元へ戻って、改めて詳細を確認しよう。
そして、そこに至るまでの間に芦名圭くんらしき人物がいたら、声をかけてみよう。
ぼくは両手で自分の頬を叩いた。
大雑把ではあるけれど、当面の予定を立てると途端に落ち着き始めていた。
金魚掬いに熱中している男の子に声をかけてみたり、仮設のベンチや休憩所を覗いて歩く。
人と向き合うのが苦手なぼくだったけれど、年下相手、それもお喋りな子ども相手となれば、自然な受け答えができた。なんだ、ぼくもちゃんと話せるじゃないか、と妙に安堵していた。
そうやって慣れてくると、今度は親子連れにも声をかけてみることにした。誘拐事件だったら厄介だと思ったからだ。
しかし、ぼくの心配はどうやら杞憂に終わりそうだった。人間の機微な感情に疎いぼくでも、さすがに誘拐犯を見逃す程の節穴ではないだろう。手を繋いだり、肩車される少年達の表情は晴れやかで、ぼくには眩し過ぎるくらいだ。
そろそろ本部というところで、ぼくはふと歩みを止めた。

仮設の白い樹脂製のベンチに、小柄な女の子が一人で座っていた。
真新しい、赤い帯に眩しい白と薄紅色の浴衣を着ていた。
おそらく広く市販されているものだと思うのだが、それは彼女のために作られたワンメイクの特注品のようによく似合っていた。
浴衣の白に映える短い黒髪は夜の黒に溶けそうでいながら、髪の艶やかさが特に際立って見えた。鮮やかな彩りの髪飾りをつけて、

今日この日のために着飾っている姿にぼくは見とれた。
子どもに対する表現としてはあんまり相応しくないかもしれないけれど、その相貌は凛々しかった。
暑さを知らない涼しげな顔は、皆どこか浮かれている祭りを一歩離れたところから、屹然として眺めているようだった。
どうやら周囲に知り合いはいないらしく、彼女は小さな背中を丸めている。
その姿に、ぼくは放っておけない気分になった。
人に対して積極的に交わろうとしなかったはずのぼくだったけれど。いつの間にか、ぼくは彼女に声をかけていた。
「きみ、一人なの？」
彼女はパッと顔を上げると、すぐに首を左右に振った。
反応自体は機敏だが、動作は決して早すぎない。なんだか、ぼくの知っている子どもとは違う印象を受けた。
「ふうん、一人じゃないんだ。誰と来たの？　お父さんやお母さんの姿が見えないけれど……」
「ううん、友達と来たの」
彼女の第一声が耳のなかを木霊する。
想像していたよりも、ずっと低い声だ。
この歳では未だに金切り声をあげる子も多いというのに、彼女の声にはそういう喧しさは含まれていない。
短いフレーズの答えが残念に思えた。もっと、彼女の声を聴きたい。ぼくは、そんなことを彼女の声音から感じ取っていた。
何故だろう。
彼女から言葉にして言い表せない、曖昧模糊とした何かを、ぼくはその時ひしひしと感じていた。
自分でもうまく表現できないなにかを、しかし、はっきりと感じることができる。
こういうと、なんとなく矛盾しているように思われてしまうかもしれないけど、そう評することしかができなかった。

「その子ってさ」
ぼくは思わずその名を口にしていた。
「もしかして、芦名圭っていう子？」
少女の細くて長い眉が僅かに動いた。
そして、目の前の少女の顔に、徐々に驚きの色が混じり始める。
「……どうして知ってるの？」
「本部に迷子の届けが出てたからね」
彼女の小さな身体から、警戒心がふっと発せられるようだった。
表情一つでここまで印象が変わるものなのか。幼くも整った顔は緊張を帯びて、途端に年齢が上がったように見えた。
「えっと。お友達、なのかな？」
「……うん」
頷いた彼女の表情からは、すでに驚愕と不信の色は消えていた。
子どもならではのころころと表情が変わる、というよりも気持ちの切り替えが早いなと思った。
「良かった。その子がどんな格好かわかるよね？　お兄さんに教えてくれないか？」
彼女はじっとぼくの瞳を見据えた。
まるで、ぼくという人間を値踏みするような所作だったが、不思議と嫌な感じはしなかった。むしろ、彼女だったら、ずっと見つめてくれても構わないとさえ思った。
「いいよ」
少女はそう言うと、ぴょんと跳ねるようにしてベンチから腰を上げた。

ぼくは芦名圭を知る少女と手を繋ぎながら、露店の連なる道を歩いていた。
露店から香る匂いは、単独だと食欲をそそるというのに。風の悪戯でそれが一つに混ざり合ってしまうと、匂いだけでお腹がいっぱいになってしまって、食べる気が失せてしまう。

彼女は自然な手つきでぼくに手を差し出し、ぼくもまたそれが当然のように握り返していた。普段のぼくならば、それが子ども相手でも躊躇ってしまうというのに。

こうして歩いていると、まるで自分に妹ができたかのような錯覚に陥ってしまうから不思議だ。

「お兄さん、警察？」

「いや、町内会のボランティア」

「志願したんだ。……偉いね」

ぼくは彼女の回答に息を飲んだ。

芦名圭の友達なら、彼女もまた小学生だろう。背格好から判断すると、幼稚園児なのではないかと見誤ってしまいそうになるくらいの、華奢な女の子だ。

そんな幼い子どもが、「ボランティア」という言葉に志願、という意味があることをすでに知っているなんて。これには驚かされた。

「よく知っているね」

「英語塾で習った」

そんな馬鹿な、と言いたかったけれど。相手は子どもだったので、ぼくは口に出して言わなかった。ぼくだって、小学校の頃から英語塾は通っていたけれど、そんな単語をその年で習った覚えはない。

提灯の灯りに照らされた彼女の横顔は、輝いて見えた。まるで、自らが光を発しているかのようでぼくはすぐに視線を逸らした。

「横浜・F・マリノスのユニフォーム」

なんの脈絡もなくそう言われたので、一体彼女がなにについて発言したのか、ぼくにはよくわからなかった。

「え？」

「圭くんの服装」

ちゃんとわかってよね、と言わんばかりに少女はちょっとだけ頬を膨らませた。ぼくが想像するよりもずっと大人びていた少女の年相応の表情に、呆けていたぼくの顔からは自然と笑みが零れた。

「ああ、ごめんね。マリノスかー」

彼女から目を背け、ぼくは明後日の方向を眺めていた。
マリノス。
脳裏に思い浮かぶのは、かろうじてサッカーチームにそんな名前があったかなぁ、というくらいだった。
マリノス、マリノス、マリノス。
こころのなかで連呼しても、ちっとも記憶が蘇って来ない。
ぼくの沈黙を不審に思ったのか、彼女がぼくの顔を窺うようにして見上げてくる。
その時、頭に像が浮かんだので、ぼくは嬉々として口を開いた。
「確か、水色と白のユニフォームだったよね！　で、イルカのキャラクターの奴」
少女は形の整った眉をきゅっと寄せた。
予想外の反応に、ぼくは思わず目を丸くしてしまう。
「……それ、川崎フロンターレ」
「あー、ごめん」
はぁ。少女は大仰に溜息をついた。
この人、こんなんでちゃんと探せるのかなぁ。彼女の溜息は言外にそう言っているみたいで、泣けてきた。
「青地に赤と白。スポンサーは胸に日産のロゴ、エンブレムの船の碇が目印」
「詳しいんだね。きみ、サッカーが好きなの？」
超年下の女の子の苛立ちをかわすため、そんなことを訊ねると「クラスの男の子は、みんな習い事がサッカーだから」と彼女は素気なく答えた。
年上相手にも物怖じしない態度だったから、てっきりクラスでは孤立しがちなのかも、と一瞬思ったが、そんなことはないみたいだ。人目を惹く容姿に、大人びた言動は同級生からもさぞ求められ、そして頼られているに違いない。
「そっか。じゃあ、圭くん探そうか。えっと、マリノスマリノス……」

ぼくがそう言うと、彼女はその場に立ち止まった。
ぼくだけが構わず先に行くものだから、傍目からはぼくが少女を引きずっているように見えただろう。
「タダは嫌」
眉間に細かい皺を寄せて言う少女に、ぼくは呆気にとられてしまった。
「えっと。さっき協力してくれる、って」
「協力はするけど。タダで、とは言ってない」
そう言うと、彼女はまだ短くて小さい手にぎゅっと力を込めた。
そして、意志の強そうな大粒の瞳で見据えてくる。
子どものくせに。凄い迫力でぼくを見上げてくるので、ぼくは思わずなにも言えなくなる。
有無を言わさず、とはまさしくこのことだな、なんて場違いにも感じた。幼くしてこの眼力となれば、大人になれば月並みな表現で捻りがないけれど、見た者を石にしてしまうメドゥーサになれるかもしれない。
「わ、わかったよ。だから、そんな顔しないで」
ぼくが半ばビビりながら両手をひらひらさせると、彼女の表情は幾分か柔らかくなった。
なんというか。
やっぱり子どもなんだな、と思った。
そして、なんでぼくは一回りも年下の女の子相手に譲歩しているのだろう、とも思った。情けない。

◆

「お兄さん、何歳？」
彼女はメロンソーダを片手に訊いた。
しれっとした顔をして白いアイスの浮いたメロンソーダを注文し、いざ会計の段になるとぼくの裾を引っ張るのだ。

正直なところ、財布から紙幣がどんどん抜けていく様を実際に目の当たりにすると胃が痛くなってくる。
「ぼくは一七歳」
彼女は急に険しい顔になった。
「……一一歳差」
その表情が、幼い女の子が普段浮かべているものとは違って見えてしまったので、ぼくは額に汗をかいた。
「どこの学校？」
「野毛山学院だけど」
「野毛高、動物園の近くの。……そっか、頭いいんだ」
彼女の瞳の奥がギラリと、まるでフラッシュライトのように輝いた。彼女の迫力ある視線に、ぼくは思わずたじろいだ。
その反応、ぼくの母の友達にそっくりだよ。そんな風に思ったけれど、ぼくは黙っておいた。
「ねえ、メロンソーダに浮いたアイス、食べないの？」
さっきから彼女は緑色の液体ばっかり啜っているので、ぼくは何気なく訊いてみた。
「……これは、後で食べる」
「ふうん。そういうところは、子どもなんだね」
子ども、という言葉に、彼女はわかりやすい反応を示した。
眉がピンと張り、表情が引き締まった。あれ、これは地雷だったかな。ぼくがそう思った時にはすでに手遅れだったようで、彼女は眉毛を吊り上げて不満を露わにした。
「そういうこと言う人には、絶対あげないから」
「えー、ぼくが買ってあげた奴なのに。一口くらい駄目？」
彼女は首を左右に振ると、鋭い視線でぼくを睨みつけてくる。
「駄目。絶対駄目」
そこまで敵意を剥き出しにされると、ちょっとぼくも寂しいし悲しい。
「じゃあ、どうしたら一口くれる？」

彼女は顔に似合わず厳しい顔をして、ぼくをじっと見つめてくる。
「わたしを子ども扱いしない、って言うなら」
「うん、わかった」
即答したというのに、彼女は先がスプーン状になったストローでアイスを崩してしまう。そうして、小さくしたものを器用に口に運んだ。
「えっ、駄目！？」
「口先だけの人には、あげない」
そう言うと、小さい舌をちょろっと出した。
そういうところも、とても子どもっぽい所作のように思えたけれど、それを指摘すると怒られそうだったので黙っておいた。

露店に並ぶ列に、徐々に背広姿が混じり始めていた。
世のお父さん達は大変だなぁ、仕事が終わった後も家族サービスなのか。そんなことをふと思いながら、視界のなかでぼくはマリノスのユニフォーム姿を探し求めていた。
「ねぇ、お兄さん、射的って得意？」
「いや、ぼくはそういうのはあんまり……」
そもそも、お小遣い自体が少なかった。それに、バイトもやっていないから収入自体が小さい。
だから、無駄遣いはあんまりしたくなかった。
そもそも、こういう場所では全然お金を使わない方なので、自然と散財したくない気持ちばかりが強くなってしまう。
しかし、少女の顔色が怪しくなってくると、とても断りにくかった。瀬奈さんの時もそうかもしれないけれど、女性からの頼みに対して、ぼくは決定的なまでに弱かった。
それがたとえ、こんな愛らしい女の子相手でも。
「ねぇ。持ち上げて」
「……え？」
「だから、持ち上げてよ。わたしの背丈じゃ、そもそも台に届かな

い」
ぼくがおろおろしていると、露店のおじさんが顔を出して射的用の銃を黙って差し出してきた。
彼女はそれをさも当然、と言わんばかりに受け取ると、慣れた手つきで構えてみせる。
「さ。ほら」
「わっ、わかったよ」
彼女に促されて、ぼくはそっと彼女の脇に手をやる。そして、腕に力を緩やかに込めるとそっと持ち上げた。
重くて持ち上がらなかったら格好悪いなぁ、なんて思っていたけれど、ぼくが想像していたよりもずっと少女は軽かった。
細い身体で、ちょっと力を入れすぎると亀裂でも入ってしまうんじゃないかと心配になった。
痩せているけれど、小さくても女の子だからか、柔らかさと暖かさを感じさせる。筋肉質と骨の鋭さが目立つ男のものにはない、優しさと温もりだった。
子ども独特の高い体温は、夏の夜でもしっかりと存在感があった。
「もうちょっと高く」
「はいはい」
ぼくの鼻のすぐ下には彼女の頭があった。短い髪のくせに、シャンプーなのかリンスなのかはわからないけれど、優しい香りを発していた。
瀬奈さんもそうだけど、女性はそれとわかる心地良い香りを発しているように思う。その香りのもとは一体どこにあるんだろうか。
ポン。
気の抜けた音がしたと思うと、ガチャンと床に何かが落ちる音がした。
終始沈黙していた店主が一言、やるねぇと呟いた。ぼくがそっと少女を降ろすと、彼は箱を差し出した。
「凄いね。よくやったね」

「うん」
ぼくが彼女の頭を優しく撫でると、彼女は恥ずかしそうに肩を縮めて大きな目をそっと細めた。
歓声を上げて喜びを露わにする訳でもなく、無関心を装う訳でもない。
その慎ましい感情の発露に、ぼくの心臓が大きく高鳴った。
ふと、彼女の顔から徐々に笑みが引いていって、真顔に戻ってしまった。
一体何事かと思うと、彼女は慌てて自分の胸を覆うように両手で隠した。
「なに、どうしたの？」
彼女は小さな口元をわななかせながら、声をくねらせながら言った。
「お兄さん」
「えっ、なに？」
「……わたしの胸、触った」
「えっ！？」
彼女は先ほどまでの笑みとは打って変わって、思い切り嫌そうな表情を浮かべた。その顔は嫌悪感をこれっぽっちも隠そうとしない。幼い女の子の剥き出しの敵意を感じて、ぼくはじりじりと後ずさってしまった。
「お兄さんがわたしの乳首触んなかったら、もっと的倒せたのに……」
「えっ、それは誤解だよ。そんな感触は一切なかったし……」
彼女の顔がくしゃくしゃと歪む。
それは年相応の表情だったけれど、できれば女の子の泣き顔は見たくなかった。
「酷い」
今まで胸を覆っていた手で、彼女は顔を覆った。そして、背中がまるでびくびくと寒さに震えるようにして跳ね上がった。

「あー、えっと、ごめんね」
ぼくはそろそろと彼女に歩み寄ると、震える背中をなるべく優しい手付きで撫でた。
彼女はそんなぼくにそっと身体を預けてくるので、ぼくは思わず彼女の華奢な体躯をしっかりと抱きしめてやる。
少女の髪から仄かに甘い香りが漂った。その身体は小さくて、細くて、心もとなかった。
ぼくはせめて彼女に自分の気持ちが伝わるように、腕に優しく、だけどしっかりと力を込めた。
「……責任、取ってくれる？」
なんだよ、責任って。
そう思ったけれど、そう言うと後々絶対面倒なことになると思ったので、ここは黙って頷いておく。
「本当？」
「ああ、本当だよ」
目の下にうっすらと涙の跡を作って、彼女は問うてくる。ぼくは彼女の投げかける視線にしっかり応えると、力強く頷き返した。
「本当に、責任、取ってくれるんだよね？」
「はい。その通りです。男の言葉に二言はありません」
そういうと彼女は、ずいと自分の顔を差し出した。
彼女のすっと伸びた綺麗な鼻や柔らかそうな形良く整った唇、大きくてくりっと丸い瞳がぼくの視界を占めた。
ぼくは咄嗟に腕を伸ばし彼女の肩に手を置いて、ぎりぎりのところで彼女を押し留めた。
しかし、彼女はぐいぐいと力を入れて迫って来る。
当然、高校生のぼくの力からすれば、押し留められるけれど。これにはちょっと驚かされた。
「……えっと？」
「ちゅうしてくれたら、信じてあげる」
この子、もしかして本気なのか？

本当に、ぼくは彼女の将来に対して、彼女曰く「責任」を取らなければならないのだろうか。
「あっ、えぇ……」
「……責任、取るんじゃなかったの？」
泣き顔になって、そんなことを迫るなんて。
子どもながら、ズルい。
ぼくは喉の奥から、小さく唸り声を上げた。
というか、ぼくで遊んでないか。そう言おうとしたけれど、彼女の浮かべている表情が思いの外真剣だった。
ここで茶化すのは、事態を悪化させてしまう。
仕方がない。
ぼくはとうとう観念して、彼女の顔に迫った。
少女が小さく息を飲むのがわかった。ぼくは彼女の白い頬にそっと唇をつけた。
木目細かい肌はすべすべしていて、とても滑らかだった。唇を押し返す肌の弾力は、柔らかくも力強かった。
僅かの間、ちょっとだけ触れただけ。
こんなの、キスのうちには入らない。そう自分に言い聞かせた。
彼女は目を丸くしていた。事態を上手く飲み込めないみたいで、目をぱちぱちを瞬かせてみたり、ぼくの唇が触れたところをそっと自分の手で触ったりした。
「……あっ、うん」
少女は惚けた顔をして、またぼくの目をじっと見つめ返した。
「えっ、何その薄い反応」
そう指摘すると、彼女の頬が見る見る赤く染まっていく。耳どころか首元まで一気に真っ赤にすると、彼女は両手でラインが絶妙の柔らかい頬を覆った。
おませな癖に結構初心というか。素直な反応をするんだな、なんて思った。
「本当だよ？　絶対にだからね。約束したんだからね！」

彼女はさっきまで赤かった顔から翻り、花が咲いたような満面の笑みになった。
その彼女の変わり身の早さに、ぼくは失笑を禁じ得ない。
それはとても可愛らしいんだけれど。その笑顔には絶対、打算が含まれていると確信した。
将来、この子は凄い――というかとんでもない女性になるんじゃないかな、と思った。
彼女の機嫌が直ったところで、男が手を差し出してきた。握手を求めているのかと思ったので握り返したら、彼はかき消されてしまいそうな小さい声でお勘定、と言った。

◆

公園内に設置された無数のスピーカーから、太鼓の音が轟いた。ステージでの演奏をそのまま流しているのだろう。彼ら彼女らの奏でる演奏は熱気や気迫まで、鼓膜を通してぼくのこころのなかまで伝わってくるような気がした。
ぼくは黒塗りの空を眺めた。
祭りが終わる頃、横浜の夜空に無数の花火が咲き、太鼓のような音を発するんだ。そう思うと、気分は童心に返ったようだった。
ぼくは女の子と手を繋ぎながら、露店が連なる道をゆったりとしたペースで歩いていた。
華やかな祭りのなかでは夏の茹だる様な暑さが、不思議と気にならなかった。
時折周囲で沸き立つ歓声も、ぼく達には無縁のことのように思えた。こんなに沢山の人達と一緒の時間を共有しているというのに、ぼくは今、彼女と二人だけしかいない世界に浸っていた。
「くじ、やりたい」
「えー、まだやるの？」
そろそろ迷子捜しをしたいというのに。

少女は不意に立ち止まると、思い出したようにそんなことを言ってぼくを困らせた。
ぼくの言葉に込められた負のニュアンスに彼女の気が障ったらしく、眉と眉の間に可愛らしい小さな皺を寄せた。
彼女の唇が尖り出す前に、ぼくはさっさと列に並ぶ。すると彼女は打って変わって大人しくなる。なんというか、現金な子どもだ。
「でも、そろそろ圭くん探しを始めないと……」
そう言った途端、握り返す力がぐっと強くなった。
ぼくが思わず彼女の顔を見ようとした。しかし、少女は顔を俯けてしまって、なかなか目を合わせてくれなかった。
「大丈夫」
かなり間が開いた後の言葉だった。だから、彼女が何に対して「大丈夫」なのか、ぼくには最初見当がつかなかった。
「……えっと、何が？」
「圭くんのこと」
ぼくは顔から困惑を消した。
この子はひょっとして、芦名圭くんの迷子に関して、なにか心当たりがあるんじゃないのか。
そう問おうとしたけど、彼女は年相応に小さくて細い掌をぼくの眼前に差し出した。
「小銭貸して」
「うん？」
「銀の目隠し削るから、小銭貸して」
そう言う彼女の手には、トランプくらいの大きさのくじが握られていた。
カードゲームの手札みたいに、結構な枚数を扇状にしていて、頭の血の気がさっと引いて行く思いだった。
「あのぅ、そこのお兄さん」
ぼくと同い年くらいの女の子が困った笑みを浮かべながら言った。
「あ、はい」

「えっとぉ、お会計なんですけどぉ……」
「ですよねぇ」
いくら瀬奈さんのためとはいえ、さすがにこの出費は財布に厳しかった。
町内会費の必要経費で落とせないだろうか、これ。

彼女はどうやら幸運の持ち主らしい。
蛍光色が眩しい、というか目に厳しいピンクのボストンバッグと、同じデザインの表面をビニールでコーティングされた手帳を当てていた。
とはいえ、さすがにこれだけの額をくじに投入してなにも当らなかったら、ぼくはさっきの女の子を締め上げてしまっただろう。
露店で扱われるものだから、安かろう悪かろうの品物だと思ったけれど、案外しっかりと作られているみたいで安心した。祭りの最中にもしも壊れてしまったら、またやりたいと言われかねない。思わず胸を撫で下ろした。
「お兄さん、携帯持ってる？」
「ああ、あるけど何に使うの？」
もしかして、これで圭くんを呼び出してくれるのだろうか。
そうだとしたら話は早い。
なるほど、彼女が「大丈夫」と言ったのにも、これなら納得がいく。
「はい、どうぞ」
はたして。
彼女は慣れた手つきでぼくが携帯にあらかじめ打ち込んでいたプロフィール画面を表示させると、ぼくの個人情報を今し方手に入れた手帳に書き込み始めた。
ぼくの表情が思わず凍り付いた。
「……えっと」
彼女は自分の仕事に没頭して、ぼくの言葉をこれっぽっちも聞い

ちゃいなかった。
「あのさ」
小学生の癖に、もしかしたらぼくよりも字がうまいかもしれない。
ぼくは少なくとも一〇年は自分自身の名前を書いてきたけれど、今し方書いた彼女の字の方がうまく書けている。案外、習字でも習っているのかもしれない。
「おーい」
難しい漢字でも詰まらずに、なめらかに鉛筆を走らせている。
習っていない漢字でも、見様見真似で書けるなんて。想像していた以上の潜在能力を彼女は持っているのかもしれない。
「もしもし」
メールアドレスなんてあっという間だった。そうか、彼女は英語塾に通っているんだった。いや、それでもぼくが彼女の年齢の時は、こんなに滑らかに字なんて書けなかったような……。
「ありがと」
彼女は携帯を律儀に折り畳んで返してくれた。
「いえ、どういたしまして」
ぼくは携帯をポケットに入れて……思わず顔を覆った。
「いや、そうじゃなくて」
ぼくの期待をことごとく裏切ってくれる目の前の少女に、ぼくは髪を掻き毟りたくなる衝動を抑え込むのに必死だった。
なんというか、彼女はやっぱりぼくで遊んでいるだろう。その直感は決して被害妄想ではないだろうと確信した。
「わたしがいいって言うまで、アドレスとか番号とか変えちゃ駄目だからね」
彼女はそう言うと、手帳や先ほどの射的で当てた箱などをボストンバッグに詰め込んだ。
そして、それをぼくに押し付けた。
どうやら、ぼくが持て、ということらしい。
「次は金魚掬い、見に行きたい」

その口調が有無を言わさぬ断言だったので、ぼくは大きく深い溜息をついた。
一体、いつになったら迷子捜しができるのだろう。

彼女は金魚掬いを食い入るようにして眺めた。
金魚達は少女の滾る視線など少しも気にならないようで、緩慢な動きでぼんやりと水中を漂っている。
しゃがみ込むとその場を離れなかったので、ぼくが「やるかい？」と訊ねた。すると、彼女は見るだけでいいと素気なく、短く応えた。
「……うち、ペットとか駄目だから」
そう言うと、少女は瞼をぎゅっと閉じた。両手を腰に回して、寂しそうな横顔をするので、ぼくのこころにも急に暗くなったような気がした。
圭くん探しに入ったのは、そろそろ八時になる頃になってからだった。
夏だというのに随分夜が更けたと思ったら、それはもうもうと立ち込める黒雲だった。一度雨粒が降れば、短い間に激しく降り注ぎそうな嫌な雲だ。
「きみは、門限とか大丈夫？」
「圭くんと一緒に帰るつもりだから」
その時の彼女の視線が、意味深だった。
言葉がなんだか上滑りしているみたいで、彼女の真意はまたどこか別のところにあるような気がした。
「きみと圭くんって、仲いいの？」
そう問うと、彼女は驚いたようにしてぼくを見た。
「……お兄さんには、関係ない」
そう言うと、彼女は困ったようで小さな肩を竦めた。
「結構、冷たいことを言うんだな」
そして、なんとなく彼女と圭くんの関係がわかったような気がした。

一緒に夏祭りに行く程仲が良いけれど、些細なことで喧嘩でもしてしまったんじゃないだろうか。
この子に加えて、年端も行かない男の子のコンビでは、きっと保護者の方も大変だっただろうな、なんて思った。
「お兄さん、わたしに気があるの？」
「……はい？」
えっ、いきなり何を言うんですか、あなたは。
「なんで、わたしと圭くんのこと、訊くの？」
「訊いちゃ駄目だったの？」
彼女は柔らかそうな頬をほんのり薄紅色に染めた。そして、痩せた身体をもじもじと揺すり始めた。
「……わたし、まだ六歳」
えっと、なんの話なんだろう。
彼女が六歳なのはすでに存じておりますが。
「なのに、お兄さん。わたしのこと、気になるんだ……」
「いや、そういう意味じゃ」
そういうと、彼女は頬をぷうっと膨らませた。
「酷い。わたし、まだ六歳だけど、女の子なのに。眼中にないんだ……」
「えっと。眼中にない、とかまた難しい言葉知ってるんだね、偉いねー」
「……そうやって、すぐ子ども扱いするし」
あれっ、なんでぼく咎められてるんだろう。
というか。
興味があるっていうと、自分はまだ六歳の子どもだと言う癖に、興味がないっていうと自分だって女の子なんだって言うのは、ちょっと卑怯じゃないか。
「ごめん。そういうつもりじゃなかったんだよ。許して」
ぼくはそう言いながら、額に滲む汗を拭った。
夜となり日中の照りつけるような日差しがないとはいえ、温度は

依然として高い。なんせ湿度が高いので、体感温度も自然と上がっているように感じる。
さっきまではあんなに気にならなかった暑さが、今では明瞭に感じられた。
今夜もまた熱帯夜になって、息苦しくなりそうな予感がした。
先ほどまでは平然としていた少女の頬にも、少しずつ朱が差してきた。
「大丈夫？　疲れてない？」
浴衣が段々と着崩れてきたせいもあって、随分疲れているように見える。
「ううん、平気」
そう言ってはにかむ彼女は、明らかに強がっているように思えた。
もともと日に焼けていない白っぽい顔から血の気が引いていた。
それ故、頬の赤さが暗がりから浮き上がってくるようで背筋が凍った。
「ちょっと休もう」
「えっ？　でも、圭くんは……」
「いいから」
ぼくは仮設の白い樹脂製のベンチに彼女を座らせると、何か飲み物を買おうとその場を離れようとした。
「えっ！？　ど、どこ行くの……」
彼女は急にぼくの服の裾を強く引っ張るもんだから、身体を大きく反らしてしまう。
コントじゃないんだから。
そう言おうとしたが、彼女の顔があまりにも真剣そのものだったので、ぼくはそのまま口を噤んだ。
ちょっと間を置いてから、改めて言った。
「いや、きみに飲み物でも買ってきてあげようと思って」
「じゃあ、わたしも……」
「大丈夫だよ。きみはここで休んでて」

「……嫌」
当初はあれほど不遜で不敵だった態度が、まるで嘘みたいだった。
撫で下ろしたような肩を落として、背中を小さく丸めているせいで、より縮んで見えた。
眉が下がっているから余計に気弱そうな印象で、まるで今し方捨てられた子猫が、飼い主に対して必死に追い縋ろうとするような視線だった。
「大丈夫だって。ほら、ここはぼくを信じて」
「でも……」
「困ったな」
ぼくは後頭部を掻いた。
急に子どもっぽくなってしまった彼女を前に、一体どうすればいいのかわからなくなる。
「どうしたら、きみは信じてくれる？」
そう訊ねると、彼女はますます困り果てたようだった。
「戻って来て」
「うん」
「絶対だよ？」
「わかった」
彼女は小さな両手で、ぼくの右手を挟み込むようにしてぐっと力を込めた。
まるで、それが誓いの印だと言われているようだった。
ぼくが傍を離れた後も、彼女はベンチの上からぼくの背中を目で追っているようだった。
すぐに露店に走ってスポーツドリンクを買うと、一目散に彼女の元へ舞い戻った。
時間にしたって、せいぜい二・三分の短い時間だったというのに、彼女は顔を強ばらせて待っていた。ぼくの姿を見て、思わず緊張を解いた時の顔は、携帯の待ち受け画像にしたいくらい可愛かった。
その小さくて赤い頬にペットボトルを押しつけた。彼女は短い悲

鳴を上げた。なんだか、計画通りの反応にぼくは笑った。
「冷たい」
小さく呻くような声が、ぼくのこころに響いた。
その時になってはじめて、ぼくがついていながらなんて不甲斐ないんだろう、と思った。迷子捜しの協力者を熱中症に追い込むなんて、いくらなんでも配慮が足りない。
そう思うと、彼女に対して申し訳なかった。
ぼくが隣に座ると、彼女は心底ホッとしたようでそっと身体を伸ばして、横にした。
息が荒い。
静かな手付きで胸を触ると、小さな心臓が彼女の身体のなかで暴れ回っているように、小刻みに脈を打ち続けていた。
その鼓動は、まるで太鼓の連打のように大きく激しくて、ぼくの表情は自然と険しくなってしまう。
「無理しちゃ駄目じゃないか」
「でも……」
彼女は目をぎゅっと瞑り、苦しそうに胸元をかきむしった。
浴衣がはだけて彼女の白い素肌が露わになる。木目細かい肌にはうっすらとだけど汗が浮き出ていた。
ぼくはそれをタオルで丁寧に拭いてやる。
段々と、彼女の表情が穏やかなものに変わっていく。最初は眉を曲げて熱い息を吐き出していたのが、徐々に緩く落ち着いたものになる。
それに合わせて、ぼくの口からは思わず安堵の溜息が零れた。
「ごめんね」
「いいんだよ。むしろ、ぼくの方こそごめん」
「こんなつもりじゃ、なかったのに」
大きな瞳が潤みだして、少しでも揺らせば彼女は泣き出してしまいそうだった。
「わたし、ただお兄さんに構って欲しくって」

ぼくの服を握る、彼女の力が一層強くなる。ぐずっと鼻をすする小さな音がした。
つううっと彼女の柔らかそうな頬の上を、大粒の涙が転がっていく。それは仮設の夜間照明の明かりで、刹那激しく光り輝く。しかし、すぐに目映さを失ってしまい、暗がりへと落ち消えていく。
「わたし、一人っ子だから」
そういうと、彼女はぼくのお腹に顔を埋めて、胸に込み上げて来た悲しみを押し殺すようにして泣き出してしまった。
一体、どれくらいの時間が過ぎたのだろう。
泣き疲れたのだろうか。それとも、落ち着いてくれたのだろうか。しばらくすると、彼女はよろよろと弱々しく顔を上げた。
「ごめんね」
「もういいって。それよりも、凄い格好だよ」
かろうじて肩にかかっているけど、何かの拍子に浴衣が脱げてしまいそうだった。ぼくの足を枕にしてベンチで横になっているというのに、無理な姿勢をしたからだろう。
彼女はおぼつかない手つきで赤い帯を解き始めた。その仕草がとても心もとなかったので、ぼくは彼女の手に自分の手を重ねた。
帯をさっと解いた時、露わになった彼女の身体を見て、ぼくはぎょっとなった。
青々とした痛々しい痣が、うっすらと色素の薄い白い肌に浮いていた。
それだけじゃない。
赤い線となった切り傷や擦り傷が、彼女の身体に生々しく、まるで彼女の華奢な体躯に這うようにして刻まれていた。
ぼくは思わず彼女を見た。
彼女は唇をぎゅっと噛み締めて、押し黙っていた。
健康的なピンクの唇が、今は力を込めているせいで白っぽくなっている。
「きみ、もしかして」

ぼくが上擦った声でそう言うと、彼女は首を振った。
短い黒髪がふわっと揺れて、彼女の優しくて甘い香りが周囲の暗がりに漂った。
「大丈夫。痛くないから」
「いや、そういう問題じゃないだろ……」
彼女は顔を歪めた。
無理矢理取り繕うとした笑顔は、一向に形にならなかった。目、口、眉がそれぞれまったく別の感情を表そうとするものだから、ちぐはぐな表情を浮かび上がらせただけだった。
「わたしが悪いの。全部」
「いや、だからって、こんな……」
激しく狼狽して取り乱すぼくを尻目に、少女は弱々しく首を振っていた。
「お兄さん、今は何も言わないで」
何かを必死に言おうとしたぼくは、その言葉に遮られてしまった。
彼女はぼくの胸に両手を置くと、ごつんと小さな額を押し付けた。その酷く疲れた声音と所作に、ぼくの方が驚いてしまった。
大人達の反応にいちいち応答することに疲れてしまった、と言いたげな仕草に、ぼくのこころは悲鳴を上げた。
無言の時が、二人の間を流れた。
ぼくはそっと、自分の胸に顔を押し付ける彼女の髪を、なるべく丁寧な手付きで撫でた。
「優しいんだね」
「えっ？」
「わたし、お兄さんみたいな人の妹になりたかった」
そんなことを言われても。
ぼくは今の彼女に一体、なんて答えてあげればいいのか、さっぱりわからなかった。
そんなことは一七年間の間に、習わなかったし、たとえそんなものをどこかで学んでいたとしても、今この場で実行なんてできなか

っただろう。
「……妹が駄目なら、彼女でもいいよ？」
彼女の笑みは、どこか自分を奮い立たせて、無理矢理作っているみたいで弱々しかった。
「随分、若い彼女だなぁ」
ぼくがそっと彼女の髪を撫でると、嬉しそうに目を細めた。
「年下の彼女じゃ駄目？　それとも、お兄さん、年上がいいの？」
「……きみは、本当に物知りだねぇ」
「お兄さん」
少女は寂しげな表情を顔から消すと、頬を膨らませた。
「早く帯を結んでよ。凄く恥ずかしい」
「ああ、そうだったね」
ぼくはいそいそと、はだけてしまった浴衣を改めて合わせ直して、帯を結んでやる。
「もっとギュっと締めないと、すぐ解けちゃう」
「あー、ごめん」
ぼくは帯を握る手に力を込めた。
「……うっ！」
彼女の背中がびくんと跳ね上がった。彼女の顔に走った痛みに、ぼくは思わず素っ頓狂な声を上げた。
「ごめん。締めすぎちゃった？」
「もうっ、痛いよ」
ドンと彼女はぼくの胸を拳で叩いた。
しかし、痛そうなのは音だけで、ぼくの胸は全然痛くなかった。
加減をして結んでやり、最後に襟などの形を整える。
浴衣についてしまった皺を丁寧にとってやると、彼女は表情を綻ばせた。
「お兄さん、優しいね」
「そりゃどうも」
「でも。お兄さん、わたしの下着、見たでしょ」

「えっ！？」
「酷い」
少女は顔を下に向けて黙り込んでしまう。
「……わたしの身体じゅう、触るし」
「あれは、タオルで汗を拭いてたんだよ！」
ぼくは困り果てて頭を掻いた。
いくらなんでも多感過ぎないか、この子。まだ小学生の癖に、なんてこと言い出すんだか。
ただ、その一方で確かに彼女にやった所作諸々を、たとえば瀬奈さんにやってしまったら確実にアウトだよなぁ、とは悲しいけれど自分でも思う。
「圭くんのことはともかく、きみもそろそろ帰った方がいいよ」
「……えっ？」
彼女の笑顔が途端に凍り付いた。
急に眉を八の字の形にして、ぼくにすがってくる。
そんな小さい身体の一体どこに、そんな力を秘めているのか。彼女が掴んだ部分が痛かった。
「どうして？」
「いや、どうして、って。もう遅くなってきたし、きみも凄く疲れてるみたいだから。これ以上、付き合わせるのも悪いからさ」
「わたしは、全然、大丈夫だよ」
そう言って、彼女は口元に薄く笑みを浮かべた。
「いや、無理しなくていいから。圭くんは、ぼくがちゃんと見つけてあげるからさ」
彼女の顔から笑みが抜けていって、しまいには目に見えて落ち込んでいってしまった。
「わたし、最後までお兄さんと……」
一瞬勢いよく顔をぼくの元に向けるものの、すぐに彼女の笑顔は萎れてしまう。
「気持ちだけで十分だから。早くおうちに帰りなさい」

少女は酷く傷ついてしまったように見えたので、ぼくのこころはちくりと痛んだ。
もっと、ぼくと一緒にいたかったのかもしれない。
でも、これ以上彼女を伴って、迷子捜しをするのは恐らく無理だろう。これで彼女が熱中症で倒れてしまったら、目も当てられなくなってしまう。
「……じゃあ、せめてお兄さんが送って」
「ああ、そういうことなら」
彼女は脆そうな笑みを浮かべてベンチから立ち上がると、ぼくの手を自然な手付きで取った。

「今日はとても楽しかった」
少女と手を繋ぎながら、夜の紅葉坂を下って行く。歩道には一足早く祭りから帰ろうとする人々で溢れ返っていて、亀といい勝負ができそうな歩みの遅さだった。
これでは普段の倍以上の時間を費やさなければ、坂を下れないだろう。それはとてももどかしいことのように思えた。
「お兄さんは……」
仮設照明のない夜道は薄暗かった。それでも彼女の顔は、暗がりから浮かび上がるようにしてよく映えた。
「紺色の浴衣の人が好きなんでしょ？」
いきなりの言葉に、ぼくの表情はさぞ強張ってしまったことだろう。
不意打ち過ぎて、正直なところまともなリアクションがとれなかった。
周囲の人々のざわめきで聞こえなかった振りをしたかったけれど、彼女は大きな瞳で見上げてきて、ぼくの応えを待っている。
「きみは、いきなり何を言うんだ？」
「……違うの？」
「それは」

違わないけどさ。
「ふうん」
彼女はそう言うと、悪戯を企んでいるような笑みを浮かべた。
「……な、なんだよ？」
「ううん、なんでもない」
「嘘つけ」
「あの人と仲良くなれるといいね」
「余計なお世話だよ」
ぼくは思わず唸った。
もしかして、ぼくの瀬奈さんに対する想いは、六歳児にもわかってしまうくらい直球なのだろうか。
それは由々しき事態だ。
ぼくは、密かに瀬奈さんに憧れているというのに、小学生にもバレてしまってはお話にならないじゃないか。
瀬奈さん本人にも、ぼくの真意が伝わっていなければいいのだけれど。さすがに、彼女にも筒抜け・丸分かりじゃあ、いくらなんでもカッコがつかない。
不意に、彼女がぼくの手を引いた。
「ん、横浜駅方面なのかい？」
「うん」
「じゃあ、そっちへ行こうか」
桜木町駅方面の道を少し外れただけで、さっきまでの人の波が嘘みたいだった。
途端に歩きやすくなったと感じるのは、前後左右に人の姿がいないからだろう。人から発せられる圧迫感が全然ないから、精神的にはかなり楽だった。
「凄く、楽しかった」
彼女は急に身体をむず痒そうにして捩った。
「そう言ってくれると、ありがたいよ」
「わたし、今まででこんなに楽しいこと、なかったと思う」

「……それは、言い過ぎじゃないかな」
「ううん、生まれて初めて、心の底からホッとできたと思う」
ぼくは彼女の様子を伺った。
スポーツを観戦する時みたいに、彼女の言葉の端々には熱がこもっていた。
頬が熟れた果実みたいに桃色に染まって、空いた手を握り拳にして、最初会った時のようなある種の冷たさをかなぐり捨て、彼女は滔々と語った。
「わたし、今日のこと、一生忘れない」
ぼくは思わず押し黙ってしまった。
ぼくにとっては、毎年訪れる夏祭りの思い出の一幕でしかないというのに。
いくら、まだ周りのもの全てが新鮮に見える幼い女の子とはいえ、いくらなんでも言い過ぎのような気がする。
「お兄さんも、わたしのこと、忘れないでね」
その時の彼女の顔は、どんな女性が浮かべる表情よりもずっと艶っぽかった。
幼い顔であるにも関わらず、ぼくにはそれが瀬奈さんのものと勝るとも劣らないくらいの雰囲気を纏っていて、こころがこれでもかと大きく揺さ振られる様だった。
「もちろんだよ」
駅に近付くにつれて、徐々に道が大きく、明るくなっていくのがわかる。
「……寂しいな」
彼女の小さな声を掻き消すように、不意に夜空が明るくなった。
「何？」
「ほら、あっちを見て」
打ち上がった花火が、まるで黒いキャンパスに色とりどりの光で筆を走らせたようにして広がっていく。
少女は思わず息を飲んで、その光景を見守っていた。

立て続けに打ち上げられる花火の爆音は、まるで早まる心臓の鼓動だった。空で爆ぜているはずなのに、それはぼく達の耳元で、そして胸元で鳴り響いているかのような、物凄い迫力だった。
声を上げることもなく、はしゃぐこともなく、ただ、その目を輝かせている姿は、純真無垢だなと思った。
大粒の瞳に、この情景を決して忘れまいと網膜に焼き付けているように、ぼくには見えた。
彼女の丸くて大きい瞳に映る花火を、ぼくは目を細めて眺めた。
「やっぱり、今日は最高の一日だと思う」
「それは良かった」
「……本当だよ？　嘘じゃないよ？」
「はいはい、ちゃんとわかってるから」
「お兄さんも、忘れちゃ駄目だよ」
「うん」
階段に気をつけながら下って行くと、目的地の横浜駅の改札口に着いた。
道中は、普段の道のりよりもずっと遠かったはずだ。小さい女の子の、それも浴衣姿にサンダルなのだ。なのに、その時のぼくにはあっという間に感じた。
それは、彼女との別れが惜しかったかもだろう。
横浜駅の構内は、夜も更けたというのに混雑は相変わらずだった。
ただでさえ、横浜駅は工事完成前に構内や駅周辺で次々と工事が行われてしまうから、一九一五年の開業から現在に至るまで、一度も工事計画が完全に完成したことはない。まるでサグラダ・ファミリアみたいだ。
ぼくはそんな混み入った駅構内を、無遠慮な大人から彼女を守る様にして歩いた。彼女は、人込みに困惑しながらも、ぼくの背に守られるのが嬉しそうだった。
これはぼくの錯覚なのだろうか。
「親御さんに一報、電話をかけておく？」

「大丈夫。電車で一駅のところだから」
そう言って静かに微笑む彼女を見て、鼻の奥がツンとむず痒くなった。
ぼくは無性に、彼女との別れがこれ以上ないというほど辛く感じた。
ここで自分の手から零れ落ちてしまったら最後、もう二度と掴めなくなってしまうのではないか、巨大な不安に苛まれた。
「ぼくが家まで送ろうか？」
そう言うと、彼女の張りつめていた表情がふにゃっと空気が抜けたように弛緩した。
初めて会った時の余所余所しさはすっかり鳴りを潜め、今ではぼくを真っ直ぐに見つめ、そして笑っていてくれる。
「嬉しい」
「でも、遠慮しておく」彼女は複雑そうな顔をした。その決断は自分も辛いんだ、と言わんばかりの顔だった。
ぼくは、彼女がくじで当てたボストンバッグを託すと、小さな手はしっかりとそれを掴んだ。
唐突に、彼女はそのなかをごそごそと漁り始めた。
「お兄さん、今日はありがと。これ……」
そう言うと、箱を差し出してきた。
「これは、最初の射的の時の」
「うん、お兄さんにあげようと思って」
「ありがとう」
ぼくが小綺麗な黒い箱をしっかりと受け取ると、彼女は顔を綻ばせた。
「毎日、身につけてね。なくしちゃ駄目だから」
「ん、お守りか何かなの？」
「家で開けてみて」
ぼく達は笑顔で視線を交わしていた。
一一歳も年下の相手によもやこんなことをするとは思わなかった。

「また、会えるといいね」
その言葉は、ぼくが言った言葉だっただろうか。
それとも、彼女の言った言葉だろうか。
……今となっては、すっかり忘れてしまった。
彼女は大きく手を振って、ぼくも精一杯それに応えた。
キツい蛍光色のボストンバッグをリュックみたいに背負った、彼女の小さな背中は改札へ向かう混雑に紛れてしまうと、すぐに見えなくなってしまった。

◆

帰り際。
黒い夜のなかに沈んだ横浜の街を、幾重にも重なった雲が取り囲んでいる。
そのなかに一人ぽつねんと浮かび上がる横浜ランドマークタワーは、まるで暗闇の包囲網から天へ逃れようとしているみたいだった。
まるで、夢を見ているみたいだった。
彼女の柔らかい笑みが脳裏に浮かんできて、ぼくは無性に嬉しくなった。
「しまった、あの子の名前、訊くの忘れてた」
ぼくはずっと彼女のことを「きみ」と呼び続けていた。
そして、自分の名前もまた教え忘れた……と思ったけど、彼女はぼくの携帯でプロフィールを確認しているはずだから、少なくとも彼女の方はぼくのことを知っている訳だ。
それはなんだか、なおさら悔しい気分だった。
そんなことを思いながら、一人夜道を歩いた。
しかし、これでようやく迷子捜しを始められる。もっとも、こんな時間から芦名圭くんを捜すのは我ながら情けなかった。もう、とっくに見つかってしまい、事件は解決してしまったかもしれない。
一度、本部の瀬奈さんに連絡を取った方がいいかもしれない。

その時、ふと頭に疑念がよぎった。
あの女の子と一緒にいる時、瀬奈さんから連絡がなかった。几帳面で仕事の丁寧な瀬奈さんが、長い間ぼくを放っておくだろうか、と思った。
やはり、電波の状態が未だに改善されてないのかもしれない。あるいは、彼女の携帯になんらかの不具合があるのかもしれない。
そんなことを思っていると、前方から壮年の男性に肩車されている男の子を見かけた。
青地に赤と白の線。スポンサーは日産。エンブレムは船の碇。
その姿は、まさにあの子の言っていた芦名圭くんそのものだったので、ぼくは思わず笑ってしまった。
ようやく見つけることができた。
そして、それがあまりにも遅すぎたことには失笑を禁じ得ない。これではなんのための見回り要員だったのだろうか。なんだか馬鹿みたいだ。
すれ違い様、ぼくは彼に声をかけた。
「圭くん、今度は迷子になっちゃ駄目だよ」
そういうと、男の子は不思議そうな顔をしてぼくを見つめた。
「……あの、息子に何か？」
肩車をしている男性もまた、ぼくを見て不思議そうな顔をしていた。
ああ、そうか。彼らは自分達を探していた人間のことなんて知らなかったに違いない。
「本部から連絡を受けて、ずっと探し回っていたんですよ。でも、こうしてちゃんと会えたみたいで良かったです」
そう言ってから、ぼくは頭を下げた。
ぼくはあの女の子に付きっきりになってしまって、結局彼らのことは二の次になってしまった。
ぼくがその旨を詫びると、二人は顔を合わせ穏やかな笑みを浮かべた。

てっきり、彼らは帰り際に現れた間抜けなぼくを笑っているのだと思った。あるいは、そんなぼくを許すつもりでそんな表情を浮かべているのだと。
「多分、それはオレじゃないよ」
少年はそういうと、綺麗な歯を見せつけるようにして笑った。
「……えっ？」
「わたし達ははぐれていません。第一、お名前が違いますから」
ぼくは目を瞬かせた。
壮年の男性は「お疲れ様でした。では失礼」と言って一礼すると、男の子を伴って駅の方へと消えてしまった。

訳が、わからなかった。

嫌な予感がした。
大慌てで本部に戻ると、瀬奈さんが弾かれたように飛び出してきた。
「何度電話しても応じてくれなくて、わたし達、心配したんですよ」
そのままの勢いで抱きつかれるんじゃないかと思うくらい急接近してきた瀬奈さんに、ぼくは驚きを隠せなかった。
「えっ？　でも、ぼく、連絡なんて受けてませんけど」
ぼくの言葉に瀬奈さんは怪訝そうな顔をした。
「……おかしいですね。わたし、ずっと電話をかけ続けたんですけど」
そう言って、携帯を取り出して開いてみると、普段表示されている時刻が表示されていなかった。
真っ黒な画面だった。
ボタンを押してみても、うんともすんとも反応がない。
「電源が……」
背中を虫が這い、首元が泡立っているようだった。
ともすれば、その場に崩れ落ちそうになるのをかろうじて踏み止

まろうとしていた。
正直なところ、他のことが考えられなかった。
頭が真っ白になってしまって、思考が一瞬の間、完全に凍りついてしまったような感じでいっぱいだった。
「……あの、迷子になったっていう子、見つかりました？」
瀬奈さんは細くて長い整った眉をきゅっと寄せた。
「それが、未だに見つかっていなくて……」
「そんなっ！？」
「総動員に近い人数だったんですけど、やっぱりこの混雑で。携帯が繋がりにくくなっていて、こちらから皆への意志疎通がうまく図れなくて……」

ぼくは今し方来た道を戻っていた。
祭りもとうとう終わってしまった深夜だというのに、歩道や路側帯には今もなお、多くの人々が列をなしていた。
心臓が音を立てている。
止まったら最後、爆発するんじゃないかというほど、大きな音を発して血液を必死に送り出していた。
普段は意識できない筋肉の微細な伸縮までも、今ではイメージできそうなくらい、実感を伴って感じられるような気がした。
「あの、迷子になった芦名圭の詳しい特徴、改めて教えてくれませんか？」
古くなった仮設テントのなかで、ぼくは瀬奈さんに詰め寄った。
蒼白になったぼくの気迫に押されて、瀬奈さんは表情を固くしながら言った。
「芦名圭ちゃん、六歳。横浜市中区からお越しの小学一年生。服装は、ピンクと白の浴衣姿、サンダルを履いていて、髪型はショートカットで頭に花の髪飾りをつけていたそうです」
嘘だ。
そんな、馬鹿な。

ぼくは平生の表情を維持できなかった。
いや、自分が今、どんな顔をしているのかわからなくなるくらいだった。
あの時、電話の通話状態が良かったら。そう思わずには、いられなかった。
奥歯を力一杯噛み締めていた。
そうでもしていないと、意識を保てそうになかった。ともすれば、ギリギリと歯軋りをしてしまいそうになる。
ぼくは、その「芦名圭」という名前から、迷子になった子どもは男の子なんだと、すっかり決めつけてしまっていた。
そう、完全に勘違いをしていたんだ。
あの時瀬奈さんに服装に関して、より詳細な情報を求めていれば。いや、ただ瀬奈さんの言葉をしっかりとぼくが確認していれば良かったんだ。
ゴウっという鈍い音がした。
最初、頭に鳥の糞でも落ちたのかと思ったが、それは雷鳴だった。それが合図だったみたいに、大きな雨粒がぼく目がけて落ちてくる。
夜の空に浮かび上がる朧けな雲から、降り出した大粒の雨がどっと大地に降り注いだ。
なんで、今なんだ。
ぼくは思わず唇を噛んだ。
叩きつけるような雨粒を含んだ強風に、ぼくの足は次第に重くなっていく。服に染み込んでいく水分の冷たさが、徐々にぼくの体力をじわじわと、しかし確実に奪っていく。
夏だというのに、季節外れの寒さを感じた。
きっと、精神的な薄ら寒さもあって、身体が想定以上に冷えているように感じているだけなんだ。そう自分に言い聞かせて、ぼくは必死に駆けた。
いつの間にか、心臓の音すら気にならなくなっていた。
胸が膨らんで弾け飛んでしまいそうな感覚はすでになく、ぼくは

ただ一心不乱に夜の横浜の街を駆け抜けた。
途中、二つの信号に引っかかるはずだったが、その時のぼくには信号で止まった記憶はなかった。きっと、信号なんて無視してしまったに違いない。
クラクションを鳴らされて、危うく轢かれそうになったかもしれない。二、三度転んだと思うけれど、どこで足を取られ、滑らせ、アスファルトに無様に転がったかなんて、思い出せなかった。
身体に走った鋭い痛みさえ、すぐに何事もなかったかのように身体の奥へと引いていった。今ならば、どんな苦痛にも耐えられるんじゃないか、そう思った。
走りながら、ふと少女に携帯を渡した時のことを思い出した。
彼女は、携帯を折り畳んだ状態で渡してくれた。それは、携帯の電源を落としたことをぼくに悟られないためだったんじゃないだろうか。
全身の力が抜けていくような思いだった。
いつの間にか、横浜駅の構内にいた。
周囲の人が眉を潜めてぼくを避けていく。これは好都合だ、なんてその時は思ったけれど、後から思えば、ぼくは頭の先から爪先までどろどろに濡れていたのだ。
ぼくに気が付かなかった不運な人は強かにぼくと正面衝突をして、まるでぼくと同じように、雨に打たれたようにずぶ濡れになってしまった。
ぼくはいつも気が付くのが遅い。
彼女がとっくのとうに改札の奥に消えてしまったというのに、少女の後ろ姿を求めてさまよっているのだから。まさに、後の祭りだ。
ズボンのポケットからＩＣカードを取り出し、改札内に入った。
係の駅員がぼくの姿を見て思わず目を見開いたが、気にも留めずに階段を上って、プラットホームに出た。
ホームに上がってから思い至る。
横浜駅のホームはＪＲだけでも八つある。彼女の降りる駅は横浜

よりも一つ先。たった、それだけしか情報がないのだ。
それなのに、一体ぼくはどこに行こうって言うんだ。
ぼくはしがみつく様に路線図のパネルに組みついた。必死に頭を回転させるも、妙案は思い浮かばなかった。
駅構内を警備していたらしい制服の警察官に肩を掴まれて、ぼくはようやく自分のしていることの無意味さを受け入れなくてはならなかった。

復路は、行きの二倍以上の時間がかかった。
その頃には、すでに古くなった本部の仮設テントはなくなっていた。明日も引き続き祭りは行われるが不審火や悪戯を警戒して、使われない時は折り畳んで収納しておく決まりになっているからだ。
慌ただしく後片付けに追われていたはずの、老若男女の町内会の面々の姿は、すでにそこにはなかった。
ぼくは誰もいない広大な空き地となった会場に、一人ぽつねんと佇んでいた。
「……ちょっと、大丈夫ですか？」
場違いな声だと思った。
物陰からそっと姿を表した瀬奈さんは、濡れ鼠のぼくを見かねてタオルを差し出してくれた。
「ずぶ濡れじゃないですか。一体どうしたんです？」
ぼくはよろよろと首を左右に振った。
そうしてだんまりを決めているぼくに、瀬奈さんは珍しく苛立ちを露わにした。
「そんなっ！？　それじゃ何が言いたいのか、わからないじゃないですか！」
瀬奈さんはらしくもなく声を張り上げた。そして、迫るようにぼくとの間合いを詰めた。
あの子のことで一杯になってしまい、これ以上深く考えられないと思った。

ぼくは、事の顛末を全て瀬奈さんに話した。
話し終えると、ぼくはその場に座り込んだ。足から力が抜けてしまって、もう立っていられなかった。
「ごめんなさい」
彼女は視線を落とした。
「わたしがしっかりしていれば、こんなことには……」
「いえ、これぼっかりはぼくのせいです」
もし、ぼくがどこかで彼女こそが芦名圭だと気が付いていれば。
いや。そもそも、帯を解いた時、身体の傷についてもっと真剣に取り合っていれば、彼女はどこかに行ってしまうことはなかったんだ。
そう思うと、ぼくは身を切られる思いだった。
身体に切り傷や痣を作って、何もない訳がなかったんだ。
夏祭りのちょっとした出来事を、今までの人生で一番だなんて言った時、ぼくは彼女にしっかりと向き合っていなければならなかったんだ。
こみ上げてくる嗚咽を、必死に堪えた。
そうやって自分を責めながらも、心のどこかではわかっていた。
ぼくはただの一七歳の、ちっぽけな何もできない高校生で、あの子に向き合ったところで、できることには限りがあったんだ。
彼女を引き取り一緒に生活することなんてできやしない。彼女の親を法廷に引きずり出すことも、警察に突き出すこともできない。
いや。そもそも、そんな面倒事が嫌いだったから、ぼくは彼女を改札で見送ってしまったんじゃなかったのか。
そして、ここでへらへらと開き直れないことを、自分が一番よく知っている。だから、せめて自分で自分自身を責めて自己満足に浸っているだけなんだ。
そう思うと辛くて、涙が溢れてきた。
それは拭っても拭っても、止め処なく流れてきて、枯れることがなかった。

あの女の子こと芦名圭は姿を消した。
その二ヶ月後、ぼくは芦名圭の家を訪ねていた。
「横浜駅から一駅」というのは、どうやら彼女の口から出まかせだったらしい。中区にある小綺麗なマンションの一室が圭の自宅だった。
考えてみれば、中区なのにどうして一番近い桜木町駅を使わなかったのか。一駅先にある横浜駅までわざわざ歩いてから「電車で一駅」だったのか。
冷静になって考えれば、辻褄が合わないことばかりだった。
もっとも、芦名圭と「彼女」を繋ぐことができなかった時点で、こんな風に考えられなかった訳だけれど。それでも、思い至らなかった自分の不甲斐なさに吐き気を覚えた。
管理の行き届いた真新しいエントランスや廊下を見て、ぼくは思わず顔を歪めた。こんなに良いところに住んでいてもなお、家を出たくなってしまうんだな。そう思ったからだ。
町内を散々騒がせたということもあってか、圭の母は肩身が狭そうに見えた。圭によく似ていた。目鼻立ちが整い、何より利発そうな外見は瓜二つだった。
ぼくは、この女を一発殴ってやりたかった。
いや、一発どころじゃない。圭の身体を傷つけたみたいに、彼女を痛めつけてやりたかった。圭の味わったものと同じ苦しみや痛みを味あわせてやりたかった。
でも、ぼくを見て後ずさった女を見ると、そんな気もすっかり霧散してしまった。
高校生のぼくが訪ねてきただけで、こんなに萎縮してしまう女を母に持つ圭が不憫でならなかったけれど。
ぼくは彼女に問いたかった。
何故、我が子に手を振るうのか。自分が苦しんだ末に産んだ実の子を、どうして傷つけることができるのか。

でも、そんなことを問うたところで、ぼくが欲し納得できる回答は絶対得られないだろう。
わかりたくもない。
圭を傷つけるに足りる「正当な」理由だなんて、ぼくはこれっぽっちも知りたくもない。
ぼくが何も言わず、去ろうとした時、圭の母はぼくの手を掴んだ。
そして、掠れた声で言った。
仕方なかったんです、と。
その言葉を発した時の彼女の顔は、他の女性よりも容姿という点で整っていながら酷く疲れ切っていた。あの圭の母親なのか、と思わず疑いたくなってしまう程だった。
ぼくはその手を振り解きたくなる衝動を必死に押さえ込んだ。そっと、ぼくは彼女の手から解放されると改めて向き直った。
彼女は何か言おうと唇を開きかけたが、結局何も言わずに口を噤んだ。

芦名圭の行方は掴めなかった。
それは、芦名の母が警察に捜索届を提出しなかったため、公には捜査が行われなかったということもある。
一応、新聞の地方欄には、彼女の名前が出てきたが、五行にも満たない扱いで、幼いこと以外は他の失踪人と扱いは変わらなかった。

暦の上では秋になったものの、残暑は厳しかった。
気温はどうやら過去の記録の更新に熱心らしく、天気予報は連日の酷暑を大々的に報道していた。雨の日でさえ、暑さと無縁の日は今のところなかった。
この日も厳しい日差しが横浜の街を容赦なく襲った。
せっかく憧れの瀬奈さんと二人で会う機会ができたというのに、そんな時に決まって脳裏に過ぎる顔は圭の顔だった。
今ならば、笑顔と笑顔の間に浮かんだ、影を含んだ切ない表情の

意味がわかった。
それを思うと、ぼくはあの時の夏祭りに戻りたかった。
戻っていって、彼女の手を掴みに行きたいと願った。
時々、そんな空想に耽って、もしも圭とその後も一緒に過ごせたら、なんて考えることがあった。
きっと、ぼくに会えただけで花が咲いたような笑みを浮かべてくれるだろう。年不相応に大人びている癖に、子どもっぽい我儘を言ってぼくを困らせるんだろう。そして、ぼくが疲れて帰ろうとすると、慌てて服の裾を強く引っ張るんだ。
さっきまでは強い口調で迫ってきたっていうのに、翻って大きな瞳を潤ませて、嫌と連呼するに違いない……。
現実逃避だ。
結局、ぼくも圭の母のように、肝心なところで仕方がないと思ってしまい、彼女の手を掴んでやれなかったのだ。
もし、ぼくがあの時圭の手を掴んで離さなければ、きっとあの子はどこかへ消えてしまわなかっただろう。そんな確信に近いものが、ぼくにはあった。
夏祭りの一時を共有しただけで、あんなに懐いてこころを許した圭。
差し伸ばされる手さえあれば、彼女はどんな手でも握り返しただろう。ちょうど、あの夏祭りのように。
せめて、彼女の逃げた先が幸せで溢れているといいのに。
落ち延びた先でも、圭は瞳にいっぱい涙を浮かべているのだろうか。それを思うと、我ながら身勝手だけれども、心配になる。
そう、ぼくとの思い出が些末なことのように思えるくらい、幸せになってくれれば。
それだけで。
それだけでいいんだ。

◆

「もう一年が経つんですね」
一八歳の夏。
例年を遥かに凌駕する酷暑のなかを、ぼくは瀬奈さんと一緒に肩を並べて歩いていた。
祭りは今年も大きなは変更なく、計画通り行われていた。
会場は多くの人々でごった返していた。その喧騒は以前までは感慨深いものだったけれど、今ではすっかりただの雑音にしか聞えなくなっていた。
町内会で見回りを依頼されていたけれど、ぼくはそれを丁重に断っていた。圭の事件が未だにぼくのなかで尾を引いていて、決着がついていなかった。
顔に幾重にも深い皺を刻み込んだ町内会長は、立ち直るためにも引き受けてくれ、と言ってぼくに迫った。
失われた何かを取り戻す為には、その何かをなくしてしまったところを探すしかない、と。
別の何かでは、開いた穴は絶対に塞がらない、そう低い声で、ぼくを必死に諭した。
その通りだと思う。
今のぼくでは、部活動に打ち込んだって、大学受験に身を委ねたって、瀬奈さんの姿を眺めたって、それで圭の存在の代わりにすることなんて、できない。
できやしないんだ。
そんなことは、この一年間で痛烈に思い知ったつもりだった。
「あの……」
瀬奈さんは遠慮がちに、ぼくに声をかけた。
「なんです？」
他でもない瀬奈さんの言葉に、普段のぼくならば嬉々として返事をしただろう。だけど、今ではそんなかつての自分が信じられなかった。

急に、自分のなかで瀬奈さんの存在が小さく萎んでいったような気がした。今では、もはや彼女にこころを突き動かされるようなことはなかった。

それを思うと、なんだか不思議だった。あんなにぼくのなかで輝いていたはずなのに。

いつか、こんな風にして、圭のことを忘れてしまう日が来るのだろうか。

それは、ぼくにとって、幸せなことなのだろうか。それとも、不幸なことなのだろうか。

「……わ、わたしの浴衣、どう思いますか？」

瀬奈さんは、今年は白っぽい浴衣を着ていた。

目をよく凝らせば彼女が身につけている下着のラインがうっすら見えてしまいそうな格好だったけれど、その姿に興奮することは今のぼくにはできなかった。

「似合っている、と思いますよ」

無愛想なぼくの返事に、瀬奈さんは弱々しい笑みで応じた。

「そうですか。ありがとう……」

瀬奈さんは弱々しく肩を落とすと、居心地が悪そうにして縮こまった。

「ま、迷ったんですよね。今年はなにを着ていこうかって。去年は濃紺だったから、今年は白にしようって……」

彼女は襟元をそっと指でなぞりながら、言った。物憂げな顔をしながら、それでも頬を僅かに薄紅色に染めて。

ぼくが顔を俯けると、瀬奈さんは努めて明るい声を出して言った。

「……でも、わたしに白が似合っているんなら、今度からはこういう浴衣を着てくることにします」

そう言って、ぼくの顔色を窺おうと瀬奈さんはそっと身体を近付けてくる。そんな瀬奈さんの仕草に、ぼくは気付かない振りをした。

二人の間で会話は絶えて、沈黙だけが重く横たわった。

視界の端で、瀬奈さんが微かに動く気配を感じ取ったけれど、ぼ

くにとってはそんなこと、瑣末な出来事だったので気にも留めなかった。
「わたしが、言う資格はないかもしれませんが……」
瀬奈さんは、一瞬逡巡したように見えた。
彼女自身、これを言うには迷いがあったのだろう。しかし、瀬奈さんは意を決して陰る表情を拭い去ると、口を開いた。
「あなたが責任を感じることは、ないと思うんです」
ぼくはよろよろと首を振った。
責任。そうだ、これはぼくの責任なんだ。
でも、それだけじゃない。それだけじゃないんだよ、瀬奈さん。
頭の片隅にはいつも圭がいて、射的やくじをやった時の情景がまるで映画のワンシーンのように浮かび上がる。
今もベンチで一人、圭が心細そうに座ってこちらに向かって視線を投げかけているんじゃないかと思うと、ぼくは誰もいないベンチでさえじっと見入ってしまう。
圭がいないのは、彼女とかくれんぼをしているからじゃないのかな、とも思う。
どこにも彼女の姿が見えず、肩を落として座っていると、背中を小さな手が突いてくる。振り向くと、そこにはあの子がいて、人を小馬鹿にする様な笑みを浮かべているんじゃないか。
そう思ってしまう。
そうじゃないのに。そう思ってしまうんだ。
「瀬奈さん」
「……はい」
「ぼく、あの子のこと、好きだったのかもしれません」
そう言ってから、ぼくは彼女に笑われると思った。
だけど、瀬奈さんはそんなことはせずに、ただ真剣な眼差しでぼくを見ていてくれた。
瀬奈さんは何かを口にしようして、やめた。
ちらっとぼくから視線を逸らし、目を瞑った。

「可愛い女の子だったんでしょうね」
「あの子、瀬奈さんのこと知ってるみたいでしたよ。紺の浴衣を着た人って言ってましたから」
「……そうなんですか」
その声音には、微かに困惑が混じっていたと思う。
彼女は一体、何に戸惑っているのだろうか。しかし、それは残念なことに、絶対ぼくには預かり知らぬところにあって、一生到達できないことをぼくはよく知っているつもりだ。
「あの時、ぼくは瀬奈さんのことを結構考えていたんですけどね。今ではあの子のことばかり考えてます」
そう言うと、瀬奈さんは目を深く閉じた。
その顔は、とても綺麗だったけれど、寂しげで視線を逸らしてしまうと消えてしまいそうなくらい、儚く見えた。
でも、今のぼくには瀬奈さんのことまで気が回らなかった。
彼女に気の利いたことを言えないのは性分なのか、と思ってしまうくらいに、ぼくは瀬奈さんには何もできずにいた。
馬鹿みたいな話だ。
ここにいない圭のことを想って、瀬奈さんを傷付けて。それで、瀬奈さんがいなくなった途端、今度は彼女のことも無遠慮に想い始めるんだ。
馬鹿げている。
本当に、馬鹿げてると自分でも思ったが、どうしようもなかった。
「……わたし、来年から横浜を離れます」
その言葉に、ぼくは何も返さなかった。
悪い予感に限って、なんで的中するんだ。ぼくはこころのなかでそう呟いた。
瀬奈さんもぼくから離れてしまう。
それはとっても悲しいことのはずなのに、こころの片隅に座るもう一人のぼくは安堵している。これで、もう瀬奈さんから慰めてもらうこともない。

瀬奈さんはそっと、ぼくの腕を掴んだ。
「あなたも、どこか別の街で暮らせばいいんじゃないですか。きっと、いい気分転換になると思いますし、心機一転という気分になりますよ」
ぼくは、そっと首を振った。
瀬奈さんは、ぼくの両肩を掴むとそっと身体をぼくに委ねてきた。憧れの人が自分の胸に飛び込んできたというのに、ぼくの心臓は高鳴らなかった。押し当てられる彼女の胸の膨よかな感触にも心を動かされることはなかった。
「その気があれば、あなたも……」
そう言って、彼女はぼくの首元に柔らかい唇をのせた。じんわりと彼女の温もりがぼくの身体に移っていく。
ぼくは首を左右に振った。
瀬奈さんは、艶っぽい眉を上げた。
普段温厚な彼女からは皆目見当がつかない、怒気を含んだ表情だった。その表情は鬼気迫るものだったけれど、同時に酷く美しいと思った。
彼女は爪先立ちで背伸びをすると、ぐっと顔をぼくに近付けて来た。
その姿が、一年前の光景と重なった。かつて、圭がぼくに責任と称して、キスを強要した時のことが脳裏に過ぎった。
ぼくは思わず腕に力を込めて、瀬奈さんの身体を押し止めた。
彼女の顔からすぐに怒りの色が抜け、変わりに悲しみに歪んだ。拒絶された事実を前に、浮かべようと思った笑みに悲壮感が混じり出す。
ぼくが彼女の肢体をやんわりと引き離そうとすると、彼女はそれに抗った。
力はそんなに強くなかったけれど、ぼくの身体に回った瀬奈さんの腕を振り解くことは困難を極めた。
「……そうじゃない。そうじゃないんですよ、瀬奈さん」

「そうじゃない？　なら、一体どうだと言うんですか？」
瀬奈さんは今にも泣きそうな、辛い顔をしながら言った。
彼女にこんな表情をさせてしまうなんて、酷い奴だと思った。それでも、ぼくはそう言わずにはいられなかった。
圭は夏祭りの時、ぼくに覚えてほしいと言ったんだ。
世界中の人間が忘れたとしてもぼくだけは彼女のことを、芦名圭のことを胸に刻んでおかなくてはならないんだ。
「あなたはこれからもずっと、あの子のいない夏祭りで、彼女の姿を追うことになるんですよ？　そんなの、あまりにも悲しすぎます……」
「瀬奈さん」
彼女は自身の白い手で、そっと目元を拭った。
「……どうして」
瀬奈さんはそう言うと、嗚咽を漏らした。
切れ長の瞳からは、幾重にも筋になって涙が溢れていた。それは暗がりのなかでも明瞭に捉えることができた。瀬奈さんの泣き顔を、ぼくは美しいとさえ思った。
どうして。
そうだ。ぼくはずっと瀬奈さんに憧れていたというのに。ずっと振り向いて欲しかったのに。いつまでも話していたいと願っていたのに。
どうして、こんなことになってしまったんだろう。
せっかく、彼女がぼくと共に、この横浜を離れようと言ってくれたのに、どうして拒んでしまったんだ。
先程までの圭に対する熱意が嘘のように、こころのなかを瀬奈さんの想いで一杯になってくる。
「……瀬奈さん、ごめん」
瀬奈さんがぼくのために泣いてくれているのだと気づいたのは、彼女が走り去った後だった。

◆

厳しい日差しが陰った。
連日の快晴が今日に限って、大きく天候が崩れた。横浜の街には暗雲がたなびき、今にも雨が降り出そうとしていた。
気がつけば、圭と別れて一〇年の月日が流れていた。あの時、一七歳だったぼくは、今ではもう三十路間近になっていた。
横浜の街は目まぐるしく変わり、行き交う人々もまたそれ相応に変化したが、それでもなお、夏祭りは今日でも行われている。
それは、今もぼくに圭の存在とその喪失を知らせるようにしてやってくる。

今年の七月、圭の母が亡くなった。
一体、彼女がどんな経緯で死に至ったのかは今となっては定かではない。病気なのか、事故なのか、自殺なのか、それとも他殺なのか。
その詳細なディティールについて、ぼくは知ることができなかった。
正直なところ、彼女の死はどうでも良かった。
だって、彼女が死んだところで、圭が戻って来る訳じゃないのだから。
酷い奴だ、自分でも思う。
彼女は圭の母親なのに。彼女もまた自分と同類で、同じ穴のむじなだと言うのに。彼女だけを責めて、ぼく自身のことは棚上げにする。
ただ、気だるかった。
あんなに憎かった圭の母の死は、まるで自分の死のようで身を切られる思いだった。それ故、ぼくは昼近くまでベッドの上に転がっていた。
律義な町内会長は、夏祭り当日の今日、電話をかけてきた。

これを区切りにしろ、と低い声で言った。彼にとっては、まるで夏の恒例行事のように、ぼくに声をかけてきてくれるのだ。
それを有り難いと思う反面、いつか瀬奈さんのようにぼくから離れていってしまうんじゃないかと思うと、辛かった。
辛いのであれば、ぼくの方から折れればいいのに。
それをわかっていながら、いつまでもこころは圭の笑顔を映し出している。
あの時握り返した小さな掌を、忘れろという方が無理なんだ。そう思い続けて、一〇年が経った。いつしか、ぼくは学制服を脱いでいた。東京の大学に通い、横浜に職場を求め、ネクタイを締めて横浜駅のプラットホームで通勤電車を待つ日々を淡々と送っている。
時が経てば、傷が癒える。
しかし、そんなのは嘘だった。少なくとも、ぼくには当てはまらなかった。むしろ、時が経てば経つ程、記憶のなかの圭の笑顔は鮮やかさを上げていく。
思い出となって、美化の対象となると、それは朽ち果て風化することなく、むしろより一層の存在感を持つようになる。
そして、ぼくのこころのなかを占める割合が大きくなればなるほど、その喪失感も同じように膨らんでいく。
「ごめんなさい。やっぱり、ぼくには無理だ」
「そうか」
ぼくは携帯を顔から離し、電話を切ろうとしたところでふと思い留まった。ディスプレイに小さく表示された着信履歴に、見慣れない電話番号が気になった。
思わず携帯をまた耳に押し当てて、声を発していた。
「……会長さん」
「うん？」
「もしかして、午前中にもお電話してくれました？」
「いいや。今のが初めてだが……」
彼はぼくの真意がわからなかったみたいで、電話の向こうで困惑

しているみたいだった。
「それが一体どうした？」
「いえ。ならいいんです」
電話を切ろうとした時、会長が言った。
「それ、瀬奈ちゃんからじゃないのか？」
ぼくがその問いに応えようとした時、会長は電話を切ってしまったようだ。
味気ない電子音が木霊した。
思わず息を飲んだ。
「……瀬奈、さん？」
ぼくは見慣れない電話番号にリダイアルしようとしてやめた。
なにを今更。
そう思ったからだ。

圭は横浜駅の改札を最後に姿を消した。
瀬奈さんはその一年後、横浜の街を離れてしまった。
圭の母は、とうとう死んでしまった。

息苦しさを感じた。

もう耐えられないと思った。

夏祭りは酷く懐かしかった。
スピーカーから轟く太鼓の音色は、かつての自分が聴いたものとよく似ていて、ぼくは思わず目を瞑った。
二七歳の大人だったはずなのに、この混雑に紛れているうちに、いつしか一七歳に戻ったような感じがした。
そんな訳、あるはずないことは重々承知していた。
なのに、背が縮み、身体は若さと熱さに溢れているような感覚があった。忘れていた胸を燃やす炎が身体の奥で揺らめいているよう

に感じた。
九年前、瀬奈さんに言われたことが不意に頭のなかに蘇ってきた。
あなたはこれからもずっと、あの子のいない夏祭りで、彼女の姿を追うことになるんですよ？
そんなの、あまりにも悲しすぎます……。

この一〇年はまさに、瀬奈さんの言う通りだったと思った。
ぼくは、圭のいない夏祭りのなかをずっと彷徨い続けているんだ。
幻影を追い求めているようで、そんなぼくの姿は瀬奈さんにとっては、きっと悲しく映ったことだろう。
この息苦しさは、きっとそういうことなんだろう。
射的の前を通った時、既視感で頭が左右に揺さ振られるようだった。

一〇年前のあの日。
一七歳だった当時のぼくは、彼女がくじで当てたボストンバッグを託すと、小さな手はしっかりとそれを掴んだ。不意に、彼女はそのなかをごそごそと漁り始めた。
「お兄さん、今日はありがと。これ……」
そう言うと、箱を差し出してきた。
「これは、最初の射的の時の」
「うん、お兄さんにあげようと思って」
「ありがとう」
彼女は顔を綻ばせた。
「毎日、身につけてね。なくしちゃ駄目だから」
「お守りか何かなの？」
「家で開けてみて」
ぼく達は笑顔で視線を交わした。一一歳も年下の相手によもやこんなことをするとは思わなかった。

「また、会えるといいね」

ぼくは祭りの会場から駆け出していた。

見慣れた風景が速度を持って、背後に流れていく。運動不足の身体にしては、やけに滑らかに動いた。日頃の鬱屈を晴らすように、ぼくはアスファルトを蹴りつけた。

かつて、祭りの会場から横浜駅まで走ったことを思い出した。あの時も、こうして一心不乱に走ったんだ。まるで、昨日のことのように思える。走った瞬間は、自分の身に一体何が起きているのか把握していなかったくせに。

自宅のドアに張り付くようにして、足を止めた。

乱暴に鍵を鍵穴に差したせいでなかなか回らなかった。もどかしくて、靴を子どもみたいに脱ぎ散らかした。

自分の部屋に戻るなり、机をひっくり返していた。

圭がいなくなった衝撃で、彼女から受け取った箱のことをすっかり失念していた。

どこかにあるはずだ。

彼女から貰った大切な贈り物なのだ、そんな簡単に捨ててしまうはずがない。

あの子の姿が消えた後のぼくの行動を振り返れば、何かの拍子に忘れてきてしまっていても不思議じゃなかったというのに。

ぼくはこの部屋のどこかに、あの箱はあるのだと確信していた。

というよりも、そう信じていなければ、ぼくは一生この呪縛からは解き放たれないんじゃないかと思った。

ようやく出て来たそれは、記憶の通りの姿だった。

まるで、ぼくの思い出のなかから出てきてしまったかのように記憶に忠実な、小綺麗な黒い箱だった。

ぼくはそれを、危険物を取り扱う様な慎重な手付きで開封した。

何が出てくるのだろうか。

想像するのももどかしくて、逸る気持ちを抑えられなかった。

なかから現れたのは、銀色のネックレスだった。
露店で扱われるものにしては、しっかりとした作りだった。案外、安物の合金ではなく、本物の銀細工なのかもしれない。
不意に、涙が滲んできた。
もう止められなかった。
ぼくはいい歳にも関わらず、みっともなく声を上げて泣いた。

戻らなくては。
そう思い立った後の行動は早かった。ぼくは首からネックレスをぶら下げて、夏祭りに戻って来ていた。
今まで動くのをやめてしまった世界が、急に動きだしたような感じがした。
胸元で暴れる銀のネックレスを掴むと、ひんやりとした。
暑くなるぼくの掌を、じんわりと冷やしてくれるようだった。圭の涼やかな横顔のような清涼感に、こころが緩んだ。
彩度を失った世界に、色が戻った。
灰色がかったフィルターは霧散し、何かが変わり、大きく動き出す予感をひしひしと感じた。
まったく、馬鹿げてる。
ネックレス一つ見つかっただけで、世界が変わるもんか。しかし、ぼくを取り巻く世界は確実に変化したように見える。
そうだ。他ならぬ彼女がくれたものだからこそ、こんなにもぼくの世界を変えられるんだ。
今のぼくには、提灯の灯りさえ、慎ましくて微笑ましく思える。
「焼きが回った、って奴かな」
確かに、ぼくを衰えさせるには充分の年月が経ってしまったと思う。
高校生の気分でいると、頭上を彩る提灯に頭をぶつけてしまう。
ぼくの背は成長の速度を緩めた同級生達を尻目に、自分でも信じられないくらい伸びた。それだけの時間が経ったということだ。

射的の前に立つと、店主は何も言わずにそっと空気銃を差し出してくれた。ぼくはそれを静かに構えた。
ぼくの隣で騒いでいた男の子達の歓声が止んだ。
あの時、圭はぼくに贈るつもりで、あの黒い箱を撃ち落としたのだろうか。
だとしたら、どんなに素晴らしいことだろう。
ぼくは今、ここであの箱のなかに収められた銀のネックレスが欲しかった訳じゃない。
ただ、この夏祭りにけじめをつけるために、引き金を引こうとしていた。
こんなことで終わりにしようだなんて、それこそ自己欺瞞も甚だしいと思いながら。
それでも。
ぼくは、心穏やかな気持ちで引き金を引いていた。
倒れなくてもいい。
ただ、この銃が発するポンという気の抜けた音が聴ければそれで。

ポン。

記憶と違わぬ音がした。
ぼくは思わず目を瞑っていた。胸元のネックレスが激しく揺れたような気がした。
かつて、圭と共にやった射的の情景がこころに灯って、霧散した。
これで、いいんだと思った。
いや、これでいいのだと思えた。
ガチャンと、一〇年前に聞いた音がした。
周囲がわっと、皆同じ反応をして沸き立った。振り返ると、いつの間にできたギャラリーが拍手をしてくれた。
無口な店主が撃ち落とした黒い箱を出しだしてくれる。ぼくはそれを受け取ったものの、扱いに困った。

ふと、ギャラリーのなかで、薄紅色の浴衣を着た女の子がいることに気がついた。どこかの誰かみたいに、頭に花をあしらった髪飾りをしていた。
ぼくはその子に近付くと「いる？」と言って、箱を差し出した。
彼女はまじまじと差し出された箱を見ていたが、首を横に振った。
「あれ、いらないの？」
「うん、あたしには大人っぽくて、似合わないから」
「……そう」
ぼくは黒い箱を脇に抱えた。
露店を出る時、店主が手を差し出してきた。握手を求めているのかと思ったので握り返したら、彼はかき消されてしまいそうな小さい声でお勘定、と言った。

携帯が鳴った。
ぼくは思わず苦笑してしまった。
一〇年前の出来事をランダムで再現してくれているような神様の計らいに、ぼくは失笑を禁じ得ない。
「もしもし」
その声は九年ぶりだと言うのに、変わったところがなかった。
過去から現在へ向けての、時を越えた電話かと思った。
「お久しぶりです、瀬奈さん」
自然と口元が綻んだ。
どんなに年月を隔てようとも、ぼくが瀬奈さんに抱く憧れは、やはり枯れることはなくこころに根を張っていたのだろう。
強ばった肩から、力がすっと抜けていく。
「お久しぶり。お元気でした？」
「ええ。お陰様で一〇年ぶりに、元気になれそうな気がします」
スピーカーの向こうで、安堵の溜息が洩れた。
上辺ではなく、こころからぼくの復活を喜んでいるように聞こえた。瀬奈さんは、一〇年経ってもあの時の瀬奈さんのままなのだと

悟った。それを知って、ぼくは無性に嬉しくなった。
「……そう、それは良かった」
不意に、彼女の声が遠くなったり、雑音が混じるようになった。
「瀬奈さん、ひょっとして泣いてます？」
「……まさか」
ノイズが混じる。
それは電波障害などでは決してなくて、瀬奈さんが鼻を啜る音だということはわかっていた。しかし、そんなことをわざわざ指摘する様な野暮なことは、あんまりしたくなかった。
「ようやく、動き出したんですね」
「ええ、スロースターターなもので」
ぼくはそう言いながら、胸にぶら下がった銀のネックレスを握り締めた。
「一〇年前のあの日、彼女がくれたプレゼントが出て来たんです。それをして射的をやったら……なんか吹っ切れちゃいました」
「なんですか、それ。全然、吹っ切れて、ない。じゃ、ないですか……」
ぼくは吹き出してしまった。
「えっと。瀬奈さん、……やっぱり泣いてるでしょ？」
「違、います。違、うんですから……」
ぼくは久しぶりにこころの底から笑い声を上げながら、人々の肩をぶつからないようにしてかわしていく。
「でも、あなたがまた、こうして笑える日が来たのは、本当に良かった」
「ぼくも、そう思います」
ぼくは呟いた。
「こうして瀬奈さんからお電話を頂いて。なんていうのかな、……仲直り、じゃないけれど。こうしてまたお話できて嬉しいです」
「別に、喧嘩してた訳じゃないですけどね」
電話の向こうの彼女は釈明するみたいにして早口で捲し立てた。

その瀬奈さんの慌て様がなんだか無性におかしくって、ぼくは笑いを噛み殺した。
「ただ、気まずくって……」
気まずい、か。
ぼくはその言葉に、九年前の夏祭りを思い出していた。
彼女が、ぼくと共に横浜の街を離れようと言ってくれた時のことを。彼女に肩を抱かれ、互いに寄り添い、首筋に彼女の唇が当てられた、あの日の夜。
「瀬奈さんは……」
ぼくは気がつくと、その言葉を口にしていた。
「ぼくのこと、好きだったんですか？」
彼女の繊細な息遣いが途絶えた。
言ってから、失言だったと思ったがもう遅かった。
「ごめんなさい。急に、九年前の出来事を思い出してしまって……」
「……ああ。そんなことも、ありましたね」
瀬奈さんはそう言うと、ふうっと小さく溜息をついた。
「あの時のあなたを見ていられなかったんです。見ているわたしまで、悲しみで気が狂ってしまいそうでした」
一拍間があってから、彼女は続けた。
「ごめんなさい。あの時、わたしもまた逃げていたんです。失意に沈むあなたの寂しさも、悲しさも、辛さも、何もかも癒すことも励ますことも叶わない、無力な自分の姿から。わたしは、あなたを救えたと思う。これは、わたしの自惚れとかではなくて……。その……」
彼女の言葉が途絶えた。
「ええ。そうです」
ぼくは言った。
六歳児でも丸分かりだったんだ。瀬奈さんにはきっと筒抜けだったに違いない。
「瀬奈さん、ぼくはあなたのことがずっと好きだったんです。ぼく

にとっての、憧れでした」
圭の存在が大きくなる前までは。
今までのぼくだったら、それこそ圭にこころを惹かれていなければ、瀬奈さんの言葉に従って、この街を後にしただろう。そして、たまに圭のことで自分を都合良く責めては、瀬奈さんに慰められていただろう。
瀬奈さんの隣にいることは叶わなかったけれど。それはとっても悲しいことだと今でも思うけれど。
それでも、ぼくは今、ようやく歩み出すことができそうだった。
「……そうだったんですか」
瀬奈さんは沈んだ声で言った。
ぼくは目を瞑り、あの時のことを振り返っていた。
瀬奈さんは、やっぱりぼくのことが好きだったんじゃないだろうか。
そうじゃなきゃ、あの時……。そう思って、ぼくは思わず首を振った。
いや、そんなこと、わかるはずないじゃないか。当て推量に、一体どれほどの価値があるのだろう。彼女が違うと言ったら、違うんだ。それでいいじゃないか。
「……でも、結局は自分自身の手で、立ち上がったんですね」
瀬奈さんはそう言うと、鼻を啜った。
「不思議ですね。もう、こんなことを話す機会はないとばかり、思ってましたから。……ごめんなさい、意地悪な物言いですよね」
「いいんですよ。いや、こちらこそ午前中に電話に出れなくてごめんなさい。あの時、あなたがそこでもう電話をかけないと決めてしまったら、こうして今話すことはなかったと思う」
ぼくは早口になりながらも言った。
瀬奈さんに、今のぼくの気持を伝えなくては。そんな気持ちに突き動かされて、ぼくは携帯を折れんばかりに握り締めていた。
「そういう意味で、本当に、ぼくは瀬奈さんに感謝してるんです。

また、こうして話しかけて下さって、ね」
「そう言ってくれると、本当に助かるんですが……」
彼女は笑った。
そして、少々間が開いてから、瀬奈さんは気まずそうにして付け加えた。
「あの、わたし、午前中に電話してないですよ？」
ぼくは瞬きを繰り返した。
一瞬、思考回路が凍りついてしまう。瀬奈さんがなんと言ったのか、うまく理解できなくて目を白黒させた。
「えっと。なんですって？」
「ですから。わたし、今の電話が最初ので、午前中には電話を差し上げていないんですよ」
ぼくは思わず眉を顰めた。
「えっと、じゃあ……」
ぼくは心当たりのない電話番号を脳裏に描いて、思わず間抜けな声を出してしまった。
「誰なんでしょう？」
「……それをわたしに訊かれても」
瀬奈さんも困惑を隠さない。
「あー、ですよね」
携帯の向こう側で、瀬奈さんが咳払いした。
「ともかく、あなたが立ち直れて良かったです」
真面目腐った言い方が、なんだか笑いを誘った。というよりも、今のぼくでは瀬奈さんの一挙手一投足に、微笑んでしまいそうだった。
「ええ」
「……わたしも、なんだか吹っ切れました」
その言葉はとても晴れやかで、清々しかった。
「近日中に横浜に戻ります。その時は会いましょう」
「ええ」

「その時を、楽しみにしてますから」
「瀬奈さんもお元気で」
電話はなかなか切れなかった。
彼女の優しい息遣いが、いつまでもスピーカーから微かに零れていた。
「……うん、またね」

◆

帰ろうと思った。
その時、不意にあのベンチに座りたくなった。
初めて圭と出会ったあのベンチ。離れたくないと言う彼女を寝かせた、あのベンチだ。
それを見たところで、何が変わるというものじゃないことは、重々承知しているつもりだ。
ただ、それを見て、納得したかったのだと思う。
あるいは、それで本当に終わりにしたかったんだ。
ぼくは銀色のネックレスを握り締めた。掌に金属独特の臭いが移ってしまうのも気にならなかった。

そこで、ぼくは思わず身体を強張らせた。

黒い髪をゆるく結った、濃紺のワンピース姿の女性の姿が目に入ったからだ。
浴衣姿ではなかった。マキシワンピと言うのだろうか。白い肩が剥き出しになって、暗がりのなかで映えていた。その姿は涼しげで、暑さとは無縁のようにぼくには見えた。
「……瀬奈、さん？」
横浜にはいないはずじゃ。
そんな言葉を発そうとして思い留まった。

ぼくの言葉が届いたのだろう。艶やかな黒髪が揺れて、そこに座った女性の顔が露わにある。
端正に整った、利発そうな顔だった。
振り返ったその人は、瀬奈さんではなかった。
しかし、その顔に明らかに見覚えがあった。
いや、その表現は適切じゃない。初めて見る顔で、見覚えなんてある訳なかった。ただ、記憶のなかにいた少女と似た相貌だった。
嘘だと思った。
そんな馬鹿な。そんなはずがないじゃないか。ぼくは一瞬、自分が狂ってしまったのかと思った。一〇年前の出来事を引き摺って、ついに精神を病んでしまったのかと。自分の正気を、本気で疑ってしまった。
まさか、こんなことって、本当にあるのか？
「やっぱり、あの人が好きだったんですね……」
声は低くなっていた。それでも、一六歳の少女らしい若さに満ち溢れている声だった。
「お兄さん」
そう言って、彼女は目を細めた。
その笑い方は瀬奈さんに良く似ていた。いや、きっと意図的に似せているのだ。
「……芦名圭。あの時の、きみなのか？」
ぼくは目を瞬かせて、目の前の少女の頭から爪先まで何度も何度も目で追った。
「ええ」
彼女はぼくの前まで進み出ると、凛とした表情を緩めて照れくさそうにはにかんだ。その笑みは、記憶のなかの彼女の笑みそのものだった。
「あの時は、世話になりました。そして、迷惑をおかけしました」
「じゃあ、きみはあの日……」
「ええ。お察しの通り、家を出ました」

彼女はふっと息をつく様にして笑った。
笑って言えることではないですね、と彼女は付け加えた。
悪びれる風もなく、気取ったところもなく、実にあっさりとした口調だったので、危くそのまま頷いてしまいそうになる。
「本当は、もう少しの間、じっとしているつもりだったんですけど」
圭は一瞬言葉に詰まりながらも、毅然とした態度で言った。
「……でも、自分を抑えられなくて」
そうして、ぼくを見上げる圭の姿はとても一六歳には見えなかった。彼女の前ではどんな女性の存在も霞んでしまうのではないか。圧倒的な存在感を、その華奢な身体からは感じた。
「もしかして、わざわざぼくに会いに来てくれたのか？」
彼女は頷いた。
その力強い頷き方は、幼い圭の頃から変わっていない。その仕草は今は懐かしく、愛おしい。
「本当は、もうこの街には帰ってこないつもりだったんです」
彼女の瞳は、一〇年前と同じ輝きを宿していた。純粋無垢で真っ直ぐな眼に映るぼくは、ただ呆然と立ち尽くし驚いているのみだった。
「でも、やっぱり一目でいいから、あなたを見たくて。……迷惑でしょう？」
自嘲するような物言いに、ぼくは首を振った。
「あれから、ずっと考えていました。……あなたは、幼いわたしを助けてくれましたけど、それはきっと良心や正義感からなのだと」
急に何を言い出すんだ。
そう思ったが、圭の真意に至ると、ぼくは口をぱくぱくと開け閉めすることしかできなかった。
「じゃあ、きみは……」
彼女は俯いてしまった。
それ故表情は読み取れなかったが、黒い髪から垣間見える形の良い耳が真っ赤になっていた。

「笑ってください。自分でもね、恥ずかしいと思ってるんですよ。……でも、わたしにとっては一〇年前のあの夏祭りの日から、ずっと気持ちは変わっていないんです」
彼女はそういうと、音もなくぼくの元へと歩み寄っていく。そして、優しい手付きでぼくの胸に手をついた。
「結構、背が伸びたと思うのに。やっぱりお兄さんの方が高いですね」
「なんで……」
ぼくは苦々しく吐き捨てた。
その声に、彼女の細い眉が悲しく歪んだ。全てを受け入れるように瞼を閉じた。
「なんで、言ってくれなかったんだよ」
言わないと決めたはずのなのに、一度気持ちが溢れ出すと、もう堪え切れなかった。
「どうして、あの時、『わたしを助けて』って、言ってくれなかったんだ……」
言ってくれれば、ぼくはきみを助けてあげようと思ったのに。
たとえ、その力が皆無だったとしても、それでもきみの味方だったのに。
見透かされてたのだと思う。
だから、頼られなかった。
そんなことは、わかってる。
彼女を詰ったところで意味はないのに、ぼくはそうせずにはいられなかった。
「……怒られちゃう、って思ったんです」
彼女はぽつりと言った。
「ごめんなさい。あの時のわたしには、そこまで頭が回らなかった……」
彼女はそう言うと、目元を覆った。手で瞳を隠せても、頬を滑る涙までは遮ることはできなかった。

彼女の頬で輝く雫を、ぼくはそっと払ってやった。
「そうだよ、そんな深く考えなくたって良かったんだよ。六歳の女の子だよ？　……ただ、ぼくの手にすがってくれれば、それだけで良かったんだ……」
顎から水滴がこぼれ落ちて初めて、ぼくは今、自分が泣いていることに気がついた。
彼女はそっと、すべすべした手でぼくの頬を伝った涙を拭った。
「……じゃあ、今、ここですがってもいいですか？」
そういうと、彼女はぼくの胸に顔を埋めた。
子どものように穏やかな笑みを浮かべて、枕に顔を委ねるようにする圭を目にすると、視界がぼんやりと滲んでしまう。
背中に、彼女の細い腕が回る。ぼくもそれに応えて、彼女を両腕で抱き締めてやる。
一〇年前に、戻った様な気がした。
それは、彼女の浮かべる微笑が、あの時の少女の浮かべているものと同じだったからだろう。

「今日ここに来るんだったら、すぐに連絡入れてよ」
「朝一でお電話したのに、出なかったのはお兄さんの方でしょう？」
ぼくの腕の中で、彼女は唇を尖らせた。
「なんだ、あの電話はきみからだったのか」
そうか。一〇年前のあの日、彼女はぼくの電話番号をしっかり手帳にメモしていた。だから、彼女の方からはぼくに電話で連絡することができたんだ。
「出てくれなかった時は、ちょっと悲しかったですけど。……でも、嬉しい。本当に連絡先を変えていなかったんですね」
優しげな微笑は悪戯を企んでいるような笑みに変わって、ぼくは思わず肩を竦めた。
「あんなこと言われたら、変えるに変えられないよ」
「……あの時のネックレス、つけてくれてるんですね」

「うん」
ぼくの胸元で輝くネックレスを、彼女はそっとなぞった。
「嬉しいです。お兄さん、恥ずかしがり屋でしょ？　こういうの、身につけてくれないんじゃないかと思いました」
「こいつのお陰で、立ち直るきっかけができたんだ」
そういうと、圭はほっとしたみたいだった。彼女の肩は撫で下ろしたようになだらかに下がった。
「ということは……」
圭は真剣な眼差しになって訊ねた。
「お兄さん。わたしのこと、好きなんですか？」
ぼくは彼女の顔をまじまじと眺めた。
彼女は、茶化す風でもなく、真面目くさった顔をして、ぼくと対峙していた。
その問いに応じるのは、とても勇気のいることだった。なんせ恥ずかしい。
でも、ぼくはすぐに頷いてみせた。
圭は肩を震わせた。
最初、泣き出してしまったのかと思ったが、どうやら、彼女は腹のうちから込み上げる笑いに堪えているみたいだった。
「お兄さん、あの時のわたし、六歳なんですけど。いくらなんでもあの時のわたしじゃあ、恋愛対象としては低すぎるんじゃ……」
そう言って、淡い薄紅色をした唇を覆った。
あまりにも笑うものだから、ぼくは思わずむすっとした表情をして言った。
「そんなこと言われるんだったら、瀬奈さんにしておくべきだった……」
ドン、と握り拳で胸を叩かれた。
「ぐほっ、一〇年前も胸を叩かれたような気が……」
「……それは、お兄さんがわたしの胸触ったり、浴衣脱がすから！」
彼女はパッとぼくから距離を取ると、左右の手で胸を覆った。か

つては両手で覆えたそれは、今では大きく膨らんでしまっていて、掌の範疇には全然収まっていなかった。
「そうですよ、あの時、ちゃんと約束したじゃないですか！？」
「きみね、待たせ過ぎだよ」
「でも、これでわたしも一六歳です。お兄さんと結婚だって、できるんですよ」
彼女はそういうと、眉を上げてみせた。
「……それは気が早過ぎるよ」
「でも、一〇年間、相思相愛じゃないですか。年の差一一歳の壁を、気にすることなく」
彼女は爪先立ちして、両腕をぼくの首に絡ませた。
ぼく達は見つめ合った。
彼女はともかく、ぼくはもういい歳になってしまったというのに、きっと頬が真っ赤になってしまっているだろう。
ぼくは、そっと黒い箱を差し出した。
「これは、一〇年前の？」
「いや、さっきあの射的屋で取ってきたんだ」
ぼくの顔を、彼女はまじまじと見つめた。
「開けていいですか？」
「どうぞ」
彼女は丁寧な手付きで開封した。
なかから現れたのは、見覚えのある銀のネックレスだった。祭りのために置かれた仮設照明に照らされて、眩い光を放っている。その白い輝きは網膜に焼き付いて離れようとしない。
「これ、お揃いじゃないですか」
「まぁ、露店のものだしね」
彼女はそれに頭を潜らすと、髪を払った。銀色のネックレスが照明の灯りを受けて、まるで自分から光り輝いているかのようだった。
「よく似合ってるんじゃないかな」
「選んだ人のセンスがいいんですよ、きっと」

「それさ、一〇年前の自分のセンスが良いって、言いたいんだよね？」
彼女は笑った。
険しい表情を緩める様な笑い方は、今でも変わっていなかった。
「お兄さん」
「何？」
「わたし、お母さんが亡くなってしまって、帰る家がないんです」
彼女は一瞬だけ、悲しそうな顔をした。
この街に帰って来るきっかけ。それもまた彼女にとって、一つの契機になったのだろう。
でも、すぐにその感情とは決別し、真っ直ぐぼくを見据えた。
「今日、お兄さんのお宅にお邪魔してもいいですか？」
ぼくは髪を掻いた。
「……ったく、一〇年遅いよ」
ぼくは最後に柄にもなく強がりながら、彼女を力一杯抱き締めていた。
もう、どこかへ行ってしまわないように。固く、キツく。
ぼく達が抱き合っていると、不意に空が明るくなった。
「これは？」
「ほら、あっちだ」
黒い空に浮かび上がった炎の華を見て、ぼく達は溜息をついた。
眩い光を発しながら、夜の空を一直線に駆け上がると、黒いキャンパスにいくつもの線や曲線をなぞっていく。色とりどりの光で筆は、迷うことなく走っていき、光の軌跡が人々に歓声を上げさせる。
圭は思わず息を飲んで、その光景を見守っていた。
立て続けに打ち上げられる花火の爆音は、まるで早まる心臓の鼓動だった。空で爆ぜているはずなのに、それはぼく達の耳元で、そして胸元で鳴り響いているかのような迫力だった。
声を上げることもなく、はしゃぐこともなく、ただ、その目を輝かせている姿は、一〇年前の祭りの帰り道の時と同じように純真無

垢だった。
大粒の瞳に、この情景を忘れまいと網膜に焼き付けているように、ぼくには見えた。
彼女の丸くて大きい瞳に映る花火を、ぼくは目を細めて眺めた。
「やっぱり、今日は最高の一日だと思います」

◆

夜空に咲く花火を見ると、ぼくはいつでも思い出す。
無数の提灯で彩られた夜の暗がりに浮かぶ、あの子の華奢な後ろ姿を。
その姿は、網膜に鮮明なまでに焼き付いて、ぼくの視界から離れなかった。

（後書き）

感謝を捧げます――私の小説を読んで下さった全ての方々に。

◆作者からのコメント◆

初めまして。作者の金椎響です。

「小説家になろう」では初めての投稿になります。なので、肩に力が入って、緊張しております。

久しぶりに公開する作品だったので、自分の筆名に恥じないくらいの完成度のものを投稿したかったのですが。そう思うと、まだまだ精進しなくてはならないという課題が見えてくる作品だったと思います。

まぁ、これから夏休みの方も多いと思いますので、お暇な時にちょっと目を通して頂けると、作者のわたしとしましても、嬉しい限りです。

賛否両論だとは思いますが、皆さんからの感想、評価、批評、意見を心からお待ちしております。

二日間で約４００００字の小説が書けるかどうか、ふと試したくなって書いてみました。

最近、思う様に小説を書くことができず、このままではこの息苦しさに屈してしまいそうだったので、今回は、完成度云々はとりあえず脇に置いて、ただ小説を書き記してみました。

結論としては、書こうという意志と時間さえあれば、なんとかなるかもしれない……ということですかね。その作品の面白さや完成度はともかくとして（苦笑）

わたしとしては、この作品は男の子の主人公ではなく、女の子の

方の視点で物語を書いてやれば良かったという後悔があります。
なんて言うんでしょうか、わたしの書いた小説らしくない、と言いますか。
ただ、わたしにとっての小説の醍醐味は普段の「わたし」とは違う自分に語り手として没入することだったので、気弱で感受性の鋭そうな男の子を一人称にしてみました。
作者自身は、こういう繊細さはあんまりないと思うのですが、いざ小説を書こうとすると、内面描写を書き込む辺り、執着といいますか、なにか思うところがあるのでしょうか。

◆おわりに◆

最後に、私のような初心者に、このような小説を投稿する機会を与えて下さった運営をはじめとする皆さま、そして、なによりも私の作品を読んで下さった全ての読者の方々に心から感謝致します。
本当に、本当に、ありがとう。

最終更新日　２０１１年０８月１７日（水）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7232v/

夏の夜に消えたあの子

2011年8月21日03時27分発行